

RE:LyricalxHunter

ティファールは邪道

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「こんな理由で、思い出さなくなかったな…」

病室で呟く固導新は転生者だ…

幼なじみの酷いモラハラで身も心もボロボロにされた彼は、胃に穴が空いてしまい入院…

その時に自分が転生者であることと特典を貰っていたことを思い出した…

彼は、自分が今世で後悔無く生きる為に変わることを決めた

「新って、ほんとなら使えないよね。それで私の幼なじみとかありえないんだけど？」

「あ、じゃあ幼なじみ辞めるわ」

「へ？」

自分を殺しかねないような奴と仲良くしたくない彼は、親にも話して幼なじみとの縁を切り、特典を鍛えたりして自由気ままに生きよう

…

そう決意した途端、出会ったのは一人の魔法少女…

「ねえ、良かったら私と特訓しない？」

「はい？」

そこから始まる、新の新しい人生…

「新、私とも模擬戦しない？」

「新君、育ち盛りなんやからたくさん食べてな？」

「新、私のことお姉ちゃんって呼んで良いからね？勉強も教えてあげ

るわ」

「新君は、私が吸血鬼だつていつたらどうする？」

これは、思い出したのが少し遅めの転生者の物語…

*このssは、L y r i c a l × H u n t e rのリメイク版です

1話から書き直したので、良かったら読み直してください

つまらない、読むに値しない、等思った場合はブラウザバックを御
願います

改稿しました！

改稿したお話には、タイトルに(改)がついてます!!

目次

プロログ：絶交	1
一話：修行	6
二話：系統	9
三話：発	13
四話：鍛練	16
五話：出会	19
六話：過去	22
七話：五大天使	28
八話：暗雲	31
九話：団欒	36
十話：邂逅	40
十一話：戦闘・前	44
十二話：戦闘・中	47
十三話：戦闘・後	51
十四話：交渉	56
十五話：説明（前）	60
十六話：説明（後）	64
十七話：嵐前静寂	69
十八話：事案	74
十九話：墜落、救護	78
二十話：戦闘	82
二十一話：聴取	86
二十二話：診察	88
二十三話：	91

二十四話：説明	93
二十五話：会議・一	98
二十五話：会議・二	101
二十五話：裏：会議・一	104
二十五話：裏：会議・二	109
二十六話：誘	113
二十七話：拒絶	116
二十八話：団欒・二	119
番外：登場人物	123
二十九話：予定	126

プロローグ：絶交

「新、ほんとは使えないね。それで私の幼なじみとかありえないんだけど」

「そう、なら幼なじみ辞めてもいいわな」

「へ？」

それまで自信満々に腕を組んで、上から目線で新を馬鹿にし続けていたセラの口元がヒクリと引き攣った

彼が反抗するなんて微塵も思っていなかったらしい…

それもそうだ…

彼はもう、固導新（こどうあらた）であって固導新では無いのだから…

青天の霹靂を食らったような顔をして、ちゃんと年相応に可愛く見えるところはさすがと言える

伊達に同級生で一、二を争う美少女と呼ばれているわけじゃないよ
うだ

大きくて小動物のような瞳と、形のいい唇、猫を思わせる切れ長の目と眉…

水泳をやっているためにこんがりと焼けた肌はニキビひとつない…

腰まで伸ばしてある黒い髪をツインテールに結んでいるからこそ映える、華奢な体型…

まあ、10歳で華奢じゃなかったら逆に恐いが…

そんな彼女…

成宮セラは固導新とは幼なじみである…

いや、だった

何故ならコイツ…

「ちよっと待ってください。何言っちゃってるんですか？辞める？幼なじみを？あははっ！冗談はその間抜けな顔だけにして欲しいんだけど？」

顔がいいだけの性格ドブスなのだ…

新は幼稚園の頃から彼女からの悪口を受け続けていたせいで、ストレスが異常に増していた：

感情の起伏が激しい幼稚園からそれなのだ：

下手したら死にかねないものを記憶が無かったとはいえそこは転生者：

それを我慢をしていたのだが、とうとう耐えきれ無くなり胃に穴が空きまくって、入院してしまった：

学校から帰る途中で何時ものようにセラから暴言を吐かれている内に意識が遠くなった彼は、倒れてしまった：

その後、目を覚ましたときは病院の一室：

意識を失ってる間に走馬燈を見た彼はつぶやくと同時に理解した：

「こんな理由で、思い出さなくなかった：!!後、あいつとこれ以上いたら：死ぬ!!」

そしてその後本人はお見舞いに来るやいなや

—使えない、役立たず、幼なじみ失格、見捨てないでいてあげてるのは私の優しさ—

そして飛び出したのが、冒頭のセリフである

—……：良く耐えてたな、俺……：いや、耐えきれなくなったから前世の記憶がよみがえったのかな？

と、割と本気で思ったのは可笑しくない

「だいたい新の分際で勝手に幼なじみ辞めるとか偉そうにしないでよ!!あんたみたいな役立たず、私以外に相手してくれるはずないでしょ！」

「……お前さ、何で俺が入院したか解る？」

「はあ!?そんなのあんたが弱いのが悪いんでしょうが!？」

新の問いにそう返すセラを見て、新は理解した：

—ああ、コイツと仲良くしていたのは間違いだったんだな

と……

「そう、俺が弱いのが悪いのか……」

そう言う新の言葉を聞いたセラはほくそ笑むような顔で再び言う

「そうよ、あんたが弱いのが悪いのよ、あんたのために時間を割いてやっているんだから、有り難く」

「そうか…じゃあ、もう関わらなくて良いですよ？」

「思いなさい…へ？」

突然の口調の変化と、他人行儀な喋り方に困惑するセラ：

そんな彼女の背中を押すようにして病室から追い出したのは、新だ
「へ、ちよ…新？」

「こんな雑魚の私めに時間を割く必要は御座いません、早急にお帰りください、あ、謝罪もいっさいいりませんよ？全ては私が悪いんですから。」

ニコニコとそう言う新だが、全く目が笑ってない…

それを見たセラは、ヤバいと思ったのか、顔を青くして謝ろうとするが…

「さっき言いましたよね？謝罪もいらなくて…あ、もう幼なじみでは無くなってもいますので来なくて結構ですから、それではさようなら」

そう言って頭を下げると、ピシヤリと扉をしめたのだった…

「ふう…」

ようやく自由だ…

と、新は思うとボスンとベッドに横になった…

「…つと、こんなことしてる場合じゃ無いな」

そう呟くと、新は特典をもう一度確認する

「確か俺の特典は…」

- 1、HUNTER×HUNTERの念能力に関する知識と才能
 - 2、いくら食べても太らない体質
 - 3、虫菌や水虫を含めたあらゆる病気にならない体質
- この三つだ…

そして自分自身が転生してきた世界は、魔法少女リリカルなのは

“…

前世でかなり人気のアニメだ

因みに作者は劇場版派です

見れなかったけど…見れなかったけど!!

「魔力はどのくらい…てかあるかどうかは解らないから、魔力に関する鍛錬は諦めるとして…」

—今自分がすべきことは…

『纏』を身に着けること…」

これである

ここで、念能力について説明しよう…

全ての生き物は「オーラ(生命力)」という力を持っておりそのオーラを自在に操ることを「念」…

この「念」によつて生まれた能力を「念能力」といい、そういった能力を持つ人を「念能力者」という…

原作HUNTER×HUNTERでは、ハンター試験に合格してハンターになれたとしても、念能力を手に入れてなければプロとして正式には認められず、「裏試験」なるもので念を習得していないハンターはそこで修行して念を習得する必要がある…

念を身に着ける方法は、二つ…

ゆつくりか（瞑想、座禅など）、無理矢理か（念能力による攻撃）

これだけである…

尚、その二つの中間であるオーラをぶつけてもらって開けてもらう、

死ぬ瀬戸際に目覚める、というのもあるがそれらは先ず起こることが少ないため割愛する…

そのため新は二つの内どちらかで念を手にするしかないのだが…

「瞑想でしか覚えられん…てか、どのくらいで覚えられるかわからない…!!」

新はそう言うと、どうすれば良いか解らずふてくしてしまい、横になつてしまう…

瞑想で目覚めるとなると、新のもらった才能がどの程度かわからないので、いつ開くかわからないのである…

—五歳頃に思い出していたならなあ…

そう思いながらゴロゴロしだす新…

暫くすると…

—あ、やべえ…眠くなってきた…

入院したり、前世の記憶を思い出したり…

そして幼なじみと絶交したりと、環境が目まぐるしく変わったから

か、新は眠りについてしまうのであった…

一話：修行

「ん…?）」

目を開くとそこはなにもない…

いや、白という色しかない空間…

そこに何故か新はいた…

「ん…?）」

この空間を見て新は驚いていた…

それもそうだ、だってここは…

「すみません、こちらの都合で呼ばせていただきました」

そう思っている新に、そう話しかけてきたのは一人の女性…

いや、女性というべきなのだろうか？

見た目が中性的だし、何よりも雰囲気人間離れしている…

というか、こんな白しかないような空間で行動できる人はいないだ

ろう…

「…えつと…ディオニューロスさん…でしたよね？」

「はい、そうですよ…改めてようこそ、株式会社アノヨ特殊転生課へ」

そう言うと、そのモノ…

ディオニューロスはにこりと笑うのであった…

ディオニューロス…

新を転生させた数多の神話の中で語られる神の石柱である…

もとはザグレウスと言う少年神だったのだが、とある出来事により

ディオニューロスとして生まれ変わる事になった…

その生まれ変わりという特殊な経験をしているため、死んだ生き物

の魂の管理などをする株式会社アノヨの中でも特殊な部署である特

殊転生課で働いている…

特殊転生課…その仕事は現世という神様転生と呼ばれることを行

う部署で、転生特典を与えたり、転生者間の掲示板管理…

そして違法行為を行った転生者の駆除などを行うことを業務とし

ている…

そんな部署に勤めているディオニューソスは、自身が担当した人物
…
固導新に対して頭を下げていた

「この度は、記憶を戻すのが遅れてしまい、大変申し訳ありませんでした…」

自身が出したちやぶ台に置いておいたお茶菓子の多賀城バナナを食べようとしていた新にそう言うディオニューソスに対して、新は…
「いや、気にしなくて良いよ…でも、なんで遅れたの?」

—やっばうめえな、多賀城バナナ…
そう思いながらディオニューソスの趣味なのだろう…

暖かい黒豆茶を飲んで問いかける新に、ディオニューソスは改めて説明を行う…

「転生する際に言ったことを覚えているでしょうか?」

「?五歳になったら記憶が戻る…って奴だよな?」

はい、と頷くと、説明を始めた

「本来、その記憶が戻るのは五歳の誕生日の10日前後で自動的に行われるものなのですが、例外があるんです」

「例外?」

「同時期に本人が体調を崩したときです」

そうなると手動で行わなくてはいけないのだという…

其を聞いた新はそういうえば…と何かを思い出していた

「俺が五歳になる頃に高熱を出して大変だった、って母から聞いたな?」

「はい…そのためこちらの操作でやらなくていけなかったのですが…」

同じ時期に別の世界で活動していた転生者が、別の世界を狙っていることを聞きつけ、その対処に終わっていたのだという…

「本来なら、すぐに終わる筈だったんですが、その…その方、その世界で信仰されていて、擬似的な神になっていたんですよね…」

「…人間って神になれるの?」

其を聞いた新の驚きの混じった問いになれますよ、と頷くディオ

ニユースス：

聞くと、神様というのは概念に近いもので、人をはじめとした多くの生き物がこういう神なんだ、と信じ込むことで意識が芽生え、神として生まれるのだという…

「だから、人間の意識を核に、生き物達の思い…いわば信仰心ね？其を肉付けすれば神様になるのよ」

「成る程…で、その転生者はそうだったと？」

「そうなのよね…おまけに特典として前世の記憶を無くしていたから、私達神の力に恐れを感じないしで、かなり時間が…」

—そのせいであなたの状態に気付かなかったの…ごめんなさい…

改めてそう言うと言を下げるディオニユースス…

「そう言うことなら仕方がないでしょう…」

「そういつてくれるのはありがたいんだけど、上がすごい怒ってるのよ…」

—こちらの都合で相手に…迷惑をかけてしまうなんて、わが社の恥だ!!

「なんて言っ来てね…まあ、確かにそうなんだけど…」

そう言うと言遠い目をする神を見て、少し同情してしまう新であった

…

「で、お詫びとして今から夢の中でだけでも修行をしてやれって指示されたのよ」

「修行を？」

キョトンとする新に、詳しく説明するディオニユースス

「だってあなた、今から始めるとしたらかなりじかかんがかかるでしょ…特典で才能貰ってるけど、どの程度貰ってるか解らないし」

「ああ…確かに」

「取りあえず、夢の中限定だけど約五年間修行に付き合っあけるわ」
宜しくね？」

と、そういつて笑うディオニユーススであった…

二話：系統

転生時のミスのお詫びとして、デュオニユースから精神時間約五年間の修行（現実世界の時間だと約24時間：睡眠時間が八時間だとして三回ほどの睡眠の中での修行）を貰い、終えてから数日後、無事に退院できた新…

そんな彼は今…

「…よし、始めるか」

自室の机に置かれた、紙の破片を浮かべた水の入ったコップを眺めていた…

そのコップも、お風呂場にあるような桶のなかにはいつている…今、新が行おうとしているのは水見式と呼ばれるもので、自身のオーラの系統を知るための儀式なのである…

やり方は簡単で、紙や葉っぱと言った水に浮かべるものをコップに張った水に浮かべて”錬”をするだけである…

其れによる反応で、自身のオーラの系統が解るのだ

「…そう言えば、オーラの系統によって性格が解るんだよな…」
ふとそんなことを思う新…

正確には、性格によってある程度解るのであつて必ずそうとは限らない、血液型診断のようなものだが、原作のHUNTER×HUNTERではかなりの的中率だったりする…

閑話休題

「…”錬”」

気を取り直して、水見式を行うため錬を行う新…

夢の中での修行のおかげか、そのオーラの質はとても高いものとなっている…

恐らく、HUNTER×HUNTERの世界でもトップクラスであろう…

暫くオーラの放出を続ける新…

と、其れによってコップにも変化が起きてきた…

「…おっ」

「ポタツ…ポタツ…」

コップの水が、コップを入れていた桶に流れ落ちていく…

其れをみた新は、小さく反応する…

コップの水の量の変化…

これは、強化系…

自身の肉体やモノの性質を強めることを得意とする、戦闘面に置いてバランスが良い系統の反応に近い…

しかし、新はそれを見て違和感を覚える…

「強化系なら溢れるような反応のはず…？溢れていたように見えない…？」

まさか…

と、新はある予測を行い、それを検証するため一度コップの水に水性ペンのインクをいれて黒くしてからまた”錬”を続ける…

夢の中での修行の成果を現実に持ち込めないため、肉体面が影響を受けるオーラの量が乏しい新はまだ五分から十分までしか出来ないが、それで充分である…

そろそろオーラが枯渇する…というタイミングで”錬”をといた

新は、桶の方に言った水を確認する…

水は、黒くなかった

「やっぱりか…」

其れをみた新は自身の系統を理解した…

新の系統は…

「特質系…！」

水の量が変わる強化系…

色が変わる放出系…

葉っぱが揺れる操作系…

味が変わる変化系…

不純物が出来る具現化系…

それらとはまた違う反応を起こす特質系…新はそんな特殊な系統であった

「俺の場合はコップに水が結露する…ある意味で強化系に近いか？」

—どんな形であれコップの水が増えたんだから…

そう考えた新は、自身の発…

いわゆる必殺技のイメージを頭のなかで組み立てる…

—結露するってことは、周りの水分を集めているってことだよな…
確かに前世から収集癖があったからおかしくはないな…

そう考えた新…

実は新、前世では一度気に入ったものは全部集めなくなる質だったのである…

気に入ったもの漫画や小説を爆買したり…

美味しいと思ったご飯屋だったら全メニュー制覇したくなったり

ゲームのアイテムやレベルアップの経験値を集めるためにプレイしたり…

兎に角気に入ったものを集めなくなる性格だったのである…

そのため、バイトのお金はほとんど使わずに貯金したりしていた…

どうやら今世でもその性質は変わらないらしい…

「…確かに念能力身に付けてすぐに思い浮かんだのがいろんな発を使いたい、だったからなあ…」

そう考えた新だったが、すぐにその考えは捨てたらしい…

自身の持てるオーラは有限…

そのため、大量に発を持つのは不可能と判断したのである…

しかし、自身の系統が特質系…

それも周りから集める、というものなら話が変わるといいうものである…

「周りからオーラを集めて貯蓄…

それをもとに様々な発を作成して、使い捨ての形で扱う」

そう考えてからの新の行動は、早かった…

「発の形のイメージは、アレにしよう!!」

—前世での大好物にして、今世では自身の生まれた日のシンボルといえるあれを!!

そう考えながら、新は自室を出て、母のもとへ向かい…

「母さん!!カボチャのランタン作りたいから、お小遣い前借りお願い

「します!!」
そう頼むのであった…

三話：発

―ペタペタ…

自身の系統がわかった日の夜…

自室にて、新はあるものを作っていた

「…あ、やべ…少し片寄った」

―少しだけとって、こっちに付け足して…

そう言いながら、新は手を動かす…

現在、新は自身の発を作るためにモデルであるカボチャのランタンを作っていた…

しかし、現在の新が本物のカボチャを加工して作るとなると重労働だし、何より長持ちしない…

そのため、新は針金と紙粘土を使って作ることにしたのだ…

現在、針金で作った骨組みにカボチャ色にした紙粘土をくっ付けている最中だった…

「うーん、カボチャのあのでこぼこの再現が意外と…」

…なんか、楽しんでる気がするが、かなり真剣にやっているのだから…

念能力において発…

所謂必殺技には肉体の強化、オーラの変質等様々なものがある…

その中でも難易度が高いのがオーラを物質化させるものである

理由は、イメージ修行の難易度にある

そこにないのにあると思ひ込んでしまうレベルまでイメージしなくてはならないのだ…

きついなんてレベルじゃない、下手したら精神が壊れる…

そのため、新はイメージのしやすいように0から作ることにしたのである

「持ち運べるように取っ手もつけて…補強と見た目をよくするためにニスも塗るか…」

そう言いながら作成すること約二日…

土日と休みの日に一気に作った新は、完成品を見て満足げな顔に

なつた…

「出来た…!!」

そう言った新の手に、カボチャのランタン…俗に言うジャックオランタンを模した紙粘土の細工物が握られていた…

大きさは直径約37・1cmで高さ18・5cm…

蒂に当たる部分から鎖が延びており、それ持つことで持ち運びが出来るようになっていた…

外皮部分を黒く塗ったあとにニスをまんべんなく塗ったことで鈍く輝き、笑ったような顔から見えるカボチャ色の中身が少し恐ろしい…

しかも、修行が完遂しても捨てなくて言いようになかにキャンドルや電球を設置出来るようになっていた…

「よし、じゃあ…始めるか」

一通り完成品に目を通して、満足げな顔になった新は、念修行を止めるとしばらくイメージ修行のみに集中した…

最初はランタンを一日中いじくりまわす…

目をつぶった状態でペタペタさわってさわり心地を確認したり、何千何万何億と絵を描いたり…

じつと見たり、お手玉のようにして遊んだりした…

ちなみに、なめたりもしたのだが、想像以上に苦かった為止めた…そんなことをしていると、夢でカボチャが出るようになってきた…

カボチャのランタンを片手に夜の道を照らしながら獣を追い払い、延々と歩く夢…

周りをふよふよと浮かんでいて自身を見つめる夢…

カボチャ頭の子供?と遊ぶ夢…

ランタンから出てきた飴玉を延々と食べると言う夢も見た…

さらに10日後

起きてる間、ふと視界の中にカボチャのランタンの幻覚が映るようになった

夢の影響か、ふよふよと気持ち良さそうに浮かんでいる…

手を伸ばすと、リアルな感触と重さを感じたように思い、鎖をとつ

て引つ張ると確かな感触を覚えた：

「もうすぐかな？」

カボチャのランタンをいじくりながらそう呟く新：

というか、最近カボチャのランタンでしか遊んでないためか、家族に変なものを見るような目で見られていて精神的にきつくなっていた：

入院してからと言うもの、父と母、そして義理の姉の家族全員が事あるごとに心配するようになってしまったのだ：

「早く具現化しないと、余計に心配されそう…」

そう言うと、新は苦笑するのであった：

そして、イメージ修行開始から1ヶ月ほど経ち：

もうすぐゴールデンウィークというところで、それは起きた：

「出来た……？」

自室のベッドで、自身の手に持つカボチャのランタンを見て呟く新

：

そんな彼のそばにある机には、新の手作りしたランタンが置かれていた：

つまり、新が持っているランタンは：

「出来た……!!」

自身の発の完成：

それを理解した新は、ガッツポーズしたのであった：

「(後は、ちゃんと機能するかどうか……か……)」

そう思った新は、頭のなかで予定を次々と組み立てていくのであった：

四話：鍛練

夜：

海鳴市にある大きな公園で、新は仁王立ちしていた：

そのそばには、カボチャのランタンがふよふよと浮いている：

「”円”による探査では、周りに人はいない：いけるな」

オーラを薄く周囲に展開することで周囲を感知する技、”円”で誰もいないことを確認した彼は、そのまま彼はあるものを探す：

「（：あった：やつぱり公園だからか、小さいやつが多いな：お!?猫らしきものがある、ラツキー♪?）」

”円”のなかにある探し物：

死んでいった生き物達のオーラ

俗に言う、怨念、負のオーラと呼ばれるものである

新はそれらを一ヶ所に集まるように誘導していく：

それにより、負のオーラが集まるごとに変質していく：

—ギチギチ：ツ：ギチギチ：

何かが軋む音と共に、姿を見せていくソレ：

「…うわあ…これは…」

全貌を明らかにしたソレを見て、少し引いたようすを見せる新：

それは、猫のからだでありながら大きさは軽自動車と変わらず、その体にはカマキリやクモ：

ゴキブリナメクジ蟻ミミズにカラス：

俗に言う害獣害虫の特徴をもった、モンスターと呼ぶにふさわしい生き物であった：

作り出した本人が言うのもなんだが、醜悪である：

「つて、ボオツとしてる暇無いんだった！」

新がそう言うと同時に、モンスターが新に襲いかかるのであった：

命の提灯（カボチャノランタン）：

新が最初に作り出した、カボチャをくり貫いて作る提灯
ジャックオランタン型の念具系発である：

これらの効果は単純：

自身の殺した生き物、または自身のオーラを貯蓄して好きなときに取り出せるというものである

新はアプリゲームのガチャなんかはほとんどしないでたくさん貯めておいて、一気に回すというスタイルである：

そのため、新は戦わない時はオーラをランタンに溜め込んで、有事の際に一気に使えるようにしているのである

殺した生き物のオーラも同じに溜め込める：

釣った魚や害虫駆除で殺した生き物のオーラは負のオーラとして回収が出来るのでそれらも率先して行っている：

お陰で趣味は害虫駆除と魚釣りである：

母親には感謝されている

しかし、それだけだと戦闘の訓練ができないし、得るオーラは少ない：

そこで、新しい発、

その名も死霊と生者の殺し合い（ハロウィンパーティー）の出番である：

効果は自身の円の内部にある死んでいった生き物達の怨念をはじめめとした負のオーラを一ヶ所に集めて怪物を造るという単純なものである：

夜の限られた時間しか使えない、時間がたつほどモンスターのオーラが減っていく、等の弱点があるが、それでも僥倖である

それを相手にすることで新は戦闘訓練を行いつつオーラの回収を行えるのだから

「ふう…終わった…」

モンスターとの戦闘から数十分経ち：

倒れたモンスターを見ながら新は息つく

「（俺って円以外にも週の適正があるのかな？）」

オーラになっていくモンスターが、ランタンに吸い込まれていくのを見ながら新はぼんやりと考える：

周とは、自分以外のものにオーラをまともわせて性質を強化したり付

与したりする技術のことである：

新は夢の中での修行で円が得意であることを知ったので、死霊と生者の殺し合い（ハロウィンパーティ）を思い付いたのである

「周を使った発も考えるか…」

そう考えながら、ランタンのオーラ収集が終わったのを確認した新はこっそりと誰にもばれないように家に帰るのであった：

五話：出会

死者と生者の殺し合い（ハロウィンパーティー）による鍛練をするようになり、数日：

世間は、休日となっていた：

それにより学校が休みである新は現在、早朝ランニングを行っていた：

「フツ…フツ…フツ…」

身体能力を鍛えることは、オーラ総量の上げるための近道：

そのため、新は身体を鍛えることも日課にしていた：

走り続け、坂道を登った新は高台に辿り着くと一息入れる：

「ふう…」

—喉乾いたな：

そう思っていると、近くに自販機を見つけた新は、ラッキー♪と言いながら小銭でジュースを買う：

「…良い景色だなあ…」

ふと高台から一望できる朝焼けに染まっていく街並みを眺め、そう呟いてしまう：

その時だった

—カコオンツ!!

「たっ!？」

突然、頭に感じた固い感触に思わず驚く新：

それと同時に、自身の頭に落ちたそれを視認する

—空き缶…？

なんでこんなものが？、と思いながら新はそれを拾うと：

「ごめんなさい！大丈夫でしたか!？」

空き缶の飛んできたであろう、茂みの向こうから出てきた一人の少女が、顔を出す…：

「!？」

その少女を見て、驚きの表情になる新：

その娘は栗色のツインテールをしており、将来美人さんになるだろ

う可愛らしい顔立ちをしていた……

—嘘だろおい!?なんでこんなところに……!?

そして、その少女を新は知っていた……

だってその娘は……

”高町なのは”……先輩」

”魔法少女リリカルなのは”シリーズの主人公で、新の通う学校……

”私立聖祥大学院付属小学校”のひとつ上の学年の先輩なんだから……

「ホントに大丈夫……?」

「ああ……はい、大丈夫です……」

数分後……

缶の当たった所にたん瘤ができているかもしれないということ、近くのベンチに座らされた新は、なのはが渡した湿らせたハンカチを当てられながらそう答えていた……

「ごめんね?まさか狙いはずすなんて思ってもみなくって……」

「別に良いですよ?……わざとじゃなかったんですから……」

本当に申し訳なさそうに謝るなのはに、苦笑しながらそういう新は改めてなのはこのことを見る……

子供ながらに整った容姿、そして誰かを思いやれる性格の良さ……

—うん、これはモテるな……

と、一人納得していると、

「!そっだ、ねえ新君今日は予定ある?」

なのはが話しかけてきた

「?無いですけど……」

「じゃあ、今日翠屋に来て欲しいな?……今日のお詫びで、ね?」

そういうと首をこてんとかしげるなのは……

翠屋とは、なのはの実家が経営している喫茶店で、シュークリームとコーヒーが有名な所だ……

それを聞いた新は……

「(まあ、予定とか無いし、原作キャラと仲良くなっても損はないし、別

に良いだろ) ……解りました」

その申し出を受けることにした……

「ホント!? ……じゃあ、また後でね?」

其を聞いたなのは嬉しそうな顔で、去っていった……

「……あれ? ……なんであの子俺の名前知ってたんだ?」

去っていくのはを見て、ふとそう思った新だが、

—まあ、行った時に聞けば良いか

そう思い直して、家に帰ることにするのであった……

六話：過去

「へえ…なのはちゃんに会ったんだ？」

その日の朝食……

現在、出張でいない父を除いた固導家の食卓……

そこでトーストにミルクバターを塗りたくっている母……

固導エレナが「懐かしいわねえ……」と言っていた

「？知り合いなの？」

其を聞いて、そう疑問を口にする新……

それなら、自己紹介していないのに自分の名前を知ってる事にも納得がいく……

そんな様子を見せる新に、エレナは頭に？を浮かべる

「？何言ってるの？…貴方が紹介したのよ？小さい頃に」

「へ？」

その言葉を聞いて、固まる新……

「ああ、そういえば聞いたことあるよ、その時の話」

そして、その話を聞いて、同じテーブルにいた女性……

いや、年齢的に言えば少女だろうか？？が目玉焼きの黄身をパンに付けながらそう言う……

「？あら、早姫は知ってるの？」

エレナは不思議そうにその少女……

娘である固導早姫（こどうさき）に問い掛けた

「うん、だって私翠屋でバイトしてるもん」

「へ……」

其を聞いてさらに固まる新……

バイトしてるのは知ってたが、まさか翠屋でやってるとは思わなかったのだろう……

普通、そう言うのは気にしないし……

「んでね？なのはちゃんが私が新の姉ってことを知った時に色々話してくれたのよ、その時の話とかも」

「まあ、昔の話だから新は忘れてたみたいだけど

苦笑しながらそう言う早姫…

それを見て、新は問い掛けた…

「…ごめん、覚えて無い…その話教えてくれない?」

良いわよ?

と、新の頼みを聞いた早姫は、当時のなのはの言葉を思い出しながら話すのであった…

なのは side

はじめまして、私の名前は高町なのはです

そして、新君のお姉さんです

といつても、新君自身は覚えてないみたいだけど…

やっぱりあの娘の所為かな?

O☆H A☆N A☆S H I しておこうかな?…とつ、今それは置いて…

私たちがどこで出逢ったかお話ししたいと思います

えっ、O☆H A☆N A☆S H I じゃ無いのかつて?

違うよっ!ちゃんとしたお話しだよ!!フエイトちゃん酷くない!?

もう…それじゃ話すね?

あれは、まだ私が五歳の時公園で一人で遊んでいた時なんだけど…

お母さん達に嫌われたくなくて、良い子で居続けなくちゃ、つて

思っていたんだ

お父さんが仕事で大怪我をして入院しちゃって…

そのせいでお店が凄く忙しくなったから、お母さん達も忙しそうに

していてとてもじゃないけど構って貰える状況ではなかったんだ…

お兄ちゃんもお姉ちゃんもお店のお手伝いで遊んでももらえなかつ

たし…

それで、私はこの状況で構ってなんて言ったら嫌われると思って良い子にしなきゃ、良い子にしなきゃって思ってずっと一人で公園で遊んでいたの

そんな時、私の前に男の子が現れたんだ

私よりも少し小さい男の子

それが新君なの

公園で遊ぼうと来てみたら、一人で遊んでいた私に興味をもったみたいで、近付いて来たんだ…

—おねえちゃんだあれえ？

つてトテトテつて近付いて来てね？

…：…すごい可愛かった、本当に…：

それから、私はその子と遊んでたの

滑り台とかブランコとかの遊具で遊んだり、

おいかけっこしたり

砂場でお城作ったり

そんなことしてたら、新君が帰る時間になっちゃって私泣いちゃったんだ…：

遠くから見ている新君のお母さん、それ見てびっくりしちゃって、私のことなだめてくれてね？

だからかな？私、新君のお母さんに泣いちゃった理由を話したの

…：

そしたら、それを聞いた新君が、ムギユユって抱き付いてきたんだ

…：

私、ビツクリしちゃってね？新君の顔を見たの、その時見た新君ね

…泣いてたの

泣きながらね…：新君、こう言ってくれたんだ…：

「ねえね、いいこくだいじょうぶだよ？あくちやんがいるから、なかなかいで？」

つて…：

それでね？

新君のお母さんも言ってくれたんだ…：

「そうだよ、なのはちゃんは十分いい子だから、家族の人が嫌いになんてならないよ!!」

—ずっと我慢してたんだよね？偉い偉い

そう言つて、頭を撫でてくれながら言ってくれたんだ…：

「子供はね？…迷惑を掛けるのがお仕事なのよ？」

迷惑をかけられて怒る親なんてまずいないんだから」

—まあ、叱ることはあるけどね？

そう言つて、笑つてくれたの……

「もし、それでも心配なら家に来なさい!!そしたら、寂しくないでしょ？」

「?ねえね、おうちくるの?」

それを聞いた新君がね?すごい目をキラキラさせて聞いてきてくれて……

それを見て私はまた泣いちゃつたんだ……

寂しさじゃなくて、嬉しさで……

それから、私はお母さん達に自分の気持ちを素直に伝えたの、そして、お母さん達は私の事を抱きしめてくれて……

しばらくの間、新君のお家でお世話になつてたんだ……

新君のお父さん、凄かったよ、本当に……

素手で大きな丸太を切つてブランコとか椅子とか作つたりしたんだよ?

まあ、子供の頃の話だから、何か見間違えたのかもだけど……

それから数日が立つてお父さんが意識を取り戻してやつと家族が元に戻つたんだ……

それで、一度新君たちのことを家にお父さんの退院祝いと私の世話をしてくれた事へのお礼として、招待したんだ……

それで、その時公園での新君と遊んだ事や私を励ましてくれた事とかをお母さん達に話したらお兄ちゃんとお父さんが

『新君、ちよつとその事詳しく教えてくれるかい? (くれるか?)』

木刀を持ちながら聞いてきてたの……

その後?

お母さんにO☆H A☆N A☆S H Iされてたよ?

後、新君のお父さんとお母さんからはお説教されてたはず……

まあ、「もし新君に何かしようとしたら嫌いになるからねっ!!!」

つて泣きそうになつてる新君のことをあやしながら言った私の言葉が一番効いて、しばらくの間真っ白になつてたけど……

まあ、自業自得だよな？

なのはside終わり

「それで、私が小学校に上がるまでの間家族ぐるみで付き合ってたの」
『へえ〜…』

ここは、なのはの家族が経営している喫茶店、”翠屋”……

そこでなのはは、遊びに来ていた友達のフェイト・テストロッサ・ハラオウン、八神はやて、アリサ・バニングス、月村すずかを相手に新との出会いを話していた……

そして、過去の話を終えて、乾いた喉をオレンジジュースで潤すのは……

その時、明るめの金髪のツーサイドアップと呼ばれる髪型にしているアリサ・バニングスが気になっていたことを聞く

「じゃあ、私達は会ってないんだ？」

「どんな子なのか楽しみだね？」

「でも、たまに会ったりとかもせえへんかったんか？」

紫色の髪に白いヘアバンドをつけた月村すずかと、茶色のセミショートヘアピンをつけた八神はやてがそう言う……

「うん、新君のお母さんはたまにシュークリームを買いに来るし、お姉さんに至ってはここでバイトしてるし……」

「？お姉さんいたの……？でも、さつき思出話では……」

出てなかったよね？

と、淡い金髪をツインテールにしたフェイト・テストロッサ・ハラオウンがそう問いかけると、なのはは軽く説明した

「お姉さん……早姫さんって言うんだけど、去年倒れていたところを保護して、記憶も無くしてるから養子として引き取ったって話だよ？」

今日はシフト入ってないみたいだから、来てないけど……

そう言うのは……

『……へ』

そして、それを聞いたアリサたちは、思っていた以上の理由に、思

わず絶句してしまうのであった……

くおまけく

一方で、固導家では……

「新、そろそろ行つてきなさい?」

「うう……恥ずかしくて行けねえ……」

「早く行かないともっと行きづらくなるわよ?」

早姫から聞いた話に思わず恥ずかしくなり、新が行きたくないと駄々を捏ねていた……

七話：五大天使

—……ついに来てしまった。喫茶『翠屋』に……

なのはが待っているだろうその前で、新は遠くを見ながらそう思う……

—仕方がないか……

もう、覚悟を決めた……!!

という顔で扉を開けようとした新だが……

—からんからん♪?

「新くんいらっしやい！待ってたよ？」

と、なのはが扉を開けて声をかけてきた

さ、入って入って!!

と、新の手を引いてなのははお店にいれるのであった……

聖祥五大天使……

聖祥大学院付属小学校の女子の中で、最も可愛らしいとされる女の子に贈られる称号である（尚、非公式である）

ファンクラブが学校の内外にあり、（非公式である）

写真なんか裏で取引されているという噂もある（非公式である）

ファンクラブの会長は、代々この学院長がやっているという噂も有名である（何度も言おう、非公式である）

そんな、聖祥五大天使だが、代々各々派閥を作っていたとされているが、現代の五大天使は派閥を作らず、一グループとして仲良くなっているという……

どんなことでも全力全開、運動が苦手な保護欲を掻き立てる、喫茶店『翠屋』の妹系看板娘、高町なのは

クールな見た目でありながら純真無垢の天然金髪娘、フェイト・テスタロツサ・ハラオウン

車椅子生活から完全復活!!炊事洗濯なんでもござれ!!オカン系美少女、八神はやて

大企業、“バニングスグループ”の跡取り娘で確り者のツンデレ

嬢、アリサ・バニングス

海鳴市どころか日本きつての投資家、月村家の

深窓の令嬢に相応しい見た目に反して運動神経抜群な月村すずか

……

この五人が、現代の聖祥五大天使である……

新はその五大天使と、同じテーブル席に座っていた……

なんでも、今日みんなで遊ぶ約束をしていたのだと言う

「(こんな事って、あるんだなあ……)」

― 拜んでおくか……

「? あんた何やってんの?」

そう思っと思って思わずナムナムと拜んでしまっ新……

それを見たアリサが、キョトンとした顔で新に質問した

「拜んでます」

「なんで?」

其れを聞いて思わずツツコミを入れるはやて……

「いや、学校内で有名な五人が揃うなんて珍しいので」

嘘はついていない……

本当は、原作キャラ五人の集まりが壮観だったからだ……

「そういえば、最近揃うことはあまり無かったね?」

「そういわれるとそうだね?……こうしてみんな揃うのは珍しいかも

……っ?」

「そやね……今までうちらは任m「はやて!」ん”ん”っ!!……家の用

事で学校休むことが多いし」

なのはとすずかがそう話し、はやてがフェイトの言葉に言い直しな

がらも賛同する……

自分たちが魔導師であることを知らない新がいるからだろう……

「ああ……だからか……

全員揃った時の写真にプレミア付いてるの」

『……へ?』

其れを聞いて固まるのは達……

「…えっと、新くん…？写真ってなんのこと？」

「？皆さんのフアンの間で出回ってるって話ですが…？」

知らないの？…？という顔をする新に「知らない知らない」という意味で首を振るなのは……

「…盗撮されてるの？私達…？」

と、怒りの滲んだ声で言うのはアリサだ……

見ると、他のメンバーも呆れた顔や少し怒った顔等と様々な反応だ

…

「取り敢えず、新…だっけ？その写真の出所解る？」

「えっと…フアンクラブの間で出回ってるって聞いただけなんですけど…」

「そのフアンって誰がいるか教えてくれる？」

其れぐらいなら……

と、自分が知ってるフアンクラブのメンバーを教える新…

後日、フアンクラブのメンバー全員が「写真が…」と言いながら落ち込んでいるのを見かけることになるのであった…

八話：暗雲

突然だが、高町なのは、フェイト・テストロツサ・ハラオウン、八神はやての三人は、時空監理局というところに所属している……

次元世界の平和維持を目的とした組織で、主な活動は、異世界で高度に発達した魔法技術の遺産：ロストロギアの封印と回収、及び管理と、管理世界内の次元犯罪の対処が挙げられる

それらを魔法技術を駆使して行うため、万年人手が不足しており、そのため実力のある者なら例え小学生でも所属が出来るのである……

そんな彼女達と新が会って、数日経ったある日のこと……

その3人は、管理局が所有、及び自分達が所属している時空航行艦『アースラ』に召集されていた

「呼び出してすまない」

フェイトの義兄であり、『アースラ』の提督

クロノ・ハラオウンが謝罪しながら言う

「ううん、放課後だったし、建校記念日で明日は休みだから大丈夫だよ？」

「ほんで、今日は何の要件や？クロノ君？」

フェイトがクロノの言葉にそう言い、はやてが続く形で問い掛ける
「ああ……実はここ数日、連続して発生している連続惨殺事件の事は知ってるか？」

「？確か、ミッドチルダで起きてる連続殺人、だよな？」

「知らない方がおかしいよ、クロノくん」

クロノの言葉にフェイトとなのはがそう返す

ここ最近、時空監理局のお膝元……というより本部のある世界で老若男女問わずの連続殺人が度重なって起きてるのだそうだ……

管理局側は威信にかかわるといふことで、大規模な調査をしていたのだが、いまだ尻尾をつかむことが出来ずにいたのである……

というのも、共通点が何も見つからず難航しているのだそうだ……

「で？その事件がどうしたん、クロノ君？」

「実は、被害者の共通点が判明したんだ」

「そう言い終え、モニターを表示するクロノ……」

画面には、殺された人達の生前の写真が写っており、さらにその下にはこれまた別の人達が表示されている……

「殺された人達全員が、管理局に所属している高ランクの魔導師と友人、または恋人関係だつてことが解つたんだ」

「!!?」

「其れを聞いた三人が驚く……」

「そんな……」

「で、でもなんで今になって解つたんや……?」

「そ、そうだよ……身元の調査とかしてたんじゃあ……!!」

「…確かにしていたんだが、全員が共通の友人ではなかったことと、その……」

「!?」

「良い淀むクロノ……」

「其れを見て首をかしげるのは達だったが……」

「ど、同性愛者が何人かいて、其れを隠していた人がいたようなんだ……」

「「……あゝ……」」

「其れを聞いて納得してしまった……」

「確かに、ミッドチルダでは同性愛は禁止されていない……」

「しかし、それは少数だし調査のためとはいえっても言いづらいだろう……」

「男同士なら、尚更だ」

「友人だと嘘をついたらバレたときに何かたくらんでいたとも思われるだろうし……」

「そのため、調査で進言することが出来ず難航させる要因となった、というわけだろう」

「コホン……三人はまだ子供だが世間からみて交互ランクの魔導師だ……そしてその関係者が狙われているとなると……」

「…アリサちゃんやすずかちゃんが狙われるかも、って事?」

「!？」

なのはの言葉に、体を固くさせてしまうフェイトとはやて…

しかし、其れを聞いたクロノは否定した

「いや、確かめてみたんだが、ミッドチルダ以外の世界で同じような事件はなかったから、大丈夫だろう…」

其れを聞いて、ホツとする三人だが、クロノが続けた言葉に真剣な顔になる

「だが、可能性は0じゃないから、秘密裏で二人に護衛をつけるから、頭にいれておいて欲しい」

その言葉にうなづく三人である…

「ああ、それから……」

と、クロノが話題を替える

「?まだ何かあるの、クロノくん？」

「なにか事件でもあったのかな？」

「最近の大きな事件……この前家に置いてあったケーキがワンホール無くなってたよね?おやつ用にとつて置いたやつ」

「ああ、それは母さんの仕業だよ、お昼について食べてしまったらしい」

「リンディ(お義母)さん、何してるの?」

クロノの言葉に、フェイトの義母にしてクロノの実母であるリンディ・ハラオウンについて呆れてしまうなのは達三人……

話題を戻すためにクロノは続ける

「事件というより、重要参考人といった方がいいな」

「重要参考人?」

ああ、と言いながらクロノはモニターを消す

「最近、海鳴市で広がってる噂は聞いたことあるか?」

「噂?」

聞いたこともない言葉に首を傾げるなのは達

「何それ?クロノ?」

「ああ、数週間ほど前から、真夜中に何かしら音がするんだそうだ」
「音?」

なのはの言葉にうなづくクロノ

「刃と刃がぶつかり合う音とか、何かを殴る音……更には砕いたりするような音らしい」

「?別に、音がするのはおかしくないんちゃう?……ケンカとか、もしくは小銭を落とす音かも知れへんし……」

はやては疑問に思う

「ああ、だが……その音がした場所が問題があるんだ……」

クロノは続ける

其れを聞いて、フェイトの顔が青くなる……

「ま、まさかお墓とか……?」

「!?フェ、フェイトちゃん、そんなはずは」

其れを聞いて青くなつたのはが否定する……

しかしそれは……

「……そうだ、しかも、夜遅くの時間帯らしい……」

クロノの言葉に打ち砕かれた……

「一寸クロノ君!?うちらお化けとかダメなんやから、そう言うの止めてくれへん!」

青くなりながら怒るはやて……

其れを見て、すまない、と謝りながらも続ける

「だが、時々僅かだがその音がした場所で魔力の反応があったんだ」

「?魔力の反応があったつてことは、魔導師の仕業なの?」

其れを聞いて、フェイト達は復活したのか話しかける

復活早いなおい

「いや、それが解らないんだ」

「え?解らないつてどういうことなの?」

「確かに、魔力の反応があったんだが、その魔力が微弱すぎるんだ……」

「?……じゃあ、ロストロギアとかなん?」

はやての言葉に否定するクロノ

ロストロギアとは、失われた技術で作られた物であり、アーティファクトやオーパーツに近いものである……

「そう思つて、簡単な捜査として音がしたという場所と、そことは別の、音がする可能性の高い場所にサーチャーを複数展開したんだ、そ

したら……」

クロノが再びモニターを表示した

「こんなものが写っていた」

その映像を見た、なのは達は…

「…へ？」

「なんや、これ…」

「!?…嘘、でしょ…?」

驚きのあまり、固まっていた…

写っていたのは、なのは達と同じくらいの少年が、木刀を片手に複

数の異形と戦う姿…

そして、その少年は…

「新、君…!?」

最近出来た、男友達だった…

九話：団欒

アースラでなのは達が話をしている一方で……
新はというと……

「”もしも魔法が使えたら?”」

「うん、正確にはどんな魔法を使いたいか?……かな?」

漫画を読むのを一度やめて夕飯の支度をしていた母にそう聞いていた

「どうしたの、急に?」

トントントン……と食材を切る手を止めずにいながらもそう聞く母に、新はそう聞こうとした理由を話そうとしたら……

「ただいま」

義姉である早妃もリビングに入ってきた

「あ、お帰り姉さん」

「お帰りなさい」

リビングに入ってきた早妃にそう言う二人……

「ただいま」と、返事をしながら早妃は手に提げていたビニール袋を新に手渡す

「はいこれ」

「?……なにこれ?」

中身を見ると、パックに入った揚げ物が入っていた

「バイト先の揚げ物担当が『賞味期限近いから全部揚げます』って言って大量に作っちゃったのよ……」

―で、余った分を持ってきたの

そう言いながらソファに腰掛ける早妃……

揚げ物を見た新は母に渡す

「あら、丁度良かったわね?今夜カレーだから乗つけちゃいましょうか?」

―余った分は明日のおかずとかにしましょうか……冷蔵庫に入れて
といて

そう言った母

「それで、何の話をしてたんだっけ？」

そのまま新に対して話題を戻すように伝える

「?ああ……さっきマンガ読んでたらふと思っただよ……魔法を使えたらどんな魔法がいいかな?、って」

—俺個人としては、ものを作る系の魔法が良いなあって思っただよ
よね

いわれた通りに冷蔵庫に揚げ物をしまいながら言うと、何となく話が解ってきた母……

「で、私たちにも聞こうかな?と……」

母の問いに頷く新……

「成る程ねえ……」

側で聞いていた姉も納得する

そんな彼女にも、新は質問をする

「因みに姉さんならどんな魔法が良い?」

「うくん……植物系の魔法かな?……うまく使えば食べ物に困らなくなりそうだし、トリコに出てくるベーコンの葉とかも作れそうじゃない?」

早妃はほらこれ♪?と、マンガのページを開いて見せた

それを聞いて苦笑する母……

「どんだけ食に飢えてんのあんたは……私だったら、自分を増やす魔法かしらねえ……」

「?自分を増やす?」

母の答えに?を浮かべる二人……

「影分身みたいな奴よ」と、教える母……

鍋に蓋をして火をかけてから少し時間が出来たのだろう……

母は二人に目を向けながら答える

「あなた達は解らないけどね?主婦って大変なのよ?」

「?そりゃあ、そうでしょう?」

「一人で家事育児に納税、(近所付き合い……その他諸々をやるんでしょ?一人でそんな大量にするなんて、普通倒れるよ?」

それを聞いて頷く母……

「そう、早妃が言ったように主婦は複数のことを一気にやらなくてはいけません……絶対に「そんなの楽勝じゃね?」とか思ってはいけませんよ!!」

「は、はい……」

突然、新に指差しながら言う母……

新はそれを見て驚きながらも頷く

「早妃が通信制の高校で家の手伝いを率先してくれるお掛けでだいぶ楽だけど、やっぱり大変なことは大変なのよ?」

「洗濯とか掃除とか、機械に任せられるものは増えているけどそれでもね……」

「で、人手を増やしてしまえば良いと言うことで自分を増やす魔法が良いと?」

「そう言うこと……それに、家事を早く終わらせたならその分パートと出来るじゃない?……分身の分も含めて」

「……ちよつと待って?それちよつとずるくないかな?」

それを聞いて流石に突っ込む新……

つまりこの人は、分身にもパートをさせて数人分のパート代を稼ごうとしているのだ……

分身に訴えられそうである……

「いや、私であることにかわりないから問題はないと思うけど?」

「分身は分身自体の思考とかもってるなら暴動とか起きるんじゃないかな?」

「暴動がおきたら解除すれば……」

「いや、そうなる前に動けなくされたら終わるんじゃない?」

……何故か段々と話が変わる方向にいつている……

その間も手を止めない母はある意味すごいのだろう……

「さて、そろそろご飯にするわよ?」

「はい」

そして、母のその一声まで論争は続いたのであった……

「さてと……」

夕飯を食べ終え、宿題するといって部屋に戻った新は、机に広げた傍目から見れば真っ白なノートに目を向けていた……

「これは絶対に他人には見せられないな……」

オーラを目に込めながらノートを見る新はそう呟く……

新から見れば、ノートには字と絵がびっしりと書かれているのだ

……

「母さんの自分を増やす魔法ってのは発想が面白いな、姉さんの植物に干渉する魔法ってのも……」

そう言いながら、一番後ろのページにペンを走らせる新……

そのペンはインクが切れていた

「(やっぱり他の人の考えはインスピレーションが湧くなあ……)」

そんなことを考えながらペンを走らせる……

「これ書いたら、蠟燭作って、オーラ補填して……やること多いな」

――遠隔制御型の自動筆記系の発、作ってみようかな……？

そう思いながらペンを走らせるのを止めない新であった……

十話：邂逅

周りが寝静まり、静かになった夜……

新は今、海鳴市が一望できる丘にいた……

夜のため、目立たぬように紺色の無地のシャツとズボンを着たうえ、明るいところに入らないよう徹底している……

「……よし、誰もいないな？」

周囲を見渡し、誰もいないことを確認した新は、死者と生者の殺しあい（ハロウィン・パーティー）を行うために両手を合わせて薄く周囲にオーラを飛ばした……

ここで、死者と生者の殺しあい（ハロウィン・パーティー）について詳しく説明しよう

新の発、死者と生者の殺しあい（ハロウィン・パーティー）は魂の提灯（カボチャランタン）を使うことを前提とした鍛練用の発である

オーラを薄く飛ばして気配を読み取る”円”……

その範囲内にある死んでいった虫や小動物をはじめとした生き物たちの負のオーラを収束させてモンスターを生み出すのである

そして、そのモンスターを倒すことでそのモンスターを作り出していた負のオーラを魂の提灯（カボチャランタン）が回収……

保管することで自身の総合オーラ量の嵩ましを凶つたものである

しかし、この死者と生者の殺しあい（ハロウィン・パーティー）、発動するにあたってルールが存在するのである

夜にしか発動させることが出来ない、発動時は両手を合わせた所謂”柏手”を取らなくてはいけない

などがある

その中にあるルールの一つとして、これがある

”生み出すモンスターは自身の総合オーラ量につき一体”

これだけ読むと解りづらいたらうか？

簡単にいうと、新自身の総合オーラが1000あると仮定して、円の中心にある負のオーラが250とした場合、生み出されるモンスターは

二体……

残りの50は切り捨てられる

因みに、この切り捨てた50はまた死者と生者の殺しあい（ハロウィン・パーティー）するとき回収される

でだ、話を戻すが公園やお墓等にも負のオーラはあるにはある……だが、前者は死んだ生き物が小さいものが多く、後者は供養されているからなのかオーラの質が悪い……

その為いくら発動させても一体から二体がほとんどであった……

その為、何時もと同じ感覚で円を行った新なのだが……

これが駄目だった……

「……やっべ……!?!」

新が今いる場所は、公園やお墓のように人の手が入っていない、自然豊かな丘だ

その為、死んでいった生き物達の負のオーラは計り知れない……

長い間留まっているものもいるだろうから、その数と質は公園やお墓等とは比べ物にならない

つまり……

「……最悪だ……」

生まれたモンスターは、一体二体では効かないということである

……

その数、6……

「かろうじてラッキーなのは、全員の居場所がバラバラなことだけだな……」

円で出現した場所を確認した新はそう言いながら時間を確認する

……

時刻は、午前一時三十二分……

「タイムリミットは一時間、それを越えたら……」

ー大変なことになる……

そう思った彼は、覚悟を決めた顔で白いバットを具現化させる新

……

「……よし、やるか!!」

彼はそう言うと、近くにいるモンスターに向かって駆け出すのであった……

「なのはちゃん、見える?」

「うくん……暗視魔法使ってるけど、やっぱりよく見えないかな……」

「仕方がないよ……暗視魔法は遠くを見るのに適してないから……」

一方で……

アースラで話をしていたなのは達は「今夜もまた反応を起こすかもしれないから待機していてくれ」と頼まれ、泊まり込みで待機

その日の夜に早速来たということで、なのは達は反応があった海鳴市を一望できる丘に来たのである

「探査魔法は、魔力の反応が弱すぎて使い物にならないんだよね?」

「うん……どこを探せば……」

―地道に探すしかないのでは?

そう思ったその時だった……

―シユゴオオオオツ!!

『……へ?』

突然現れた大きな竜巻……

それが消えたと同時に、空からなにか落ちてきた……

『!?!』

―なんかヤバイ……!?!

それを、約二年ほど荒事を仕事としていたなのは達はそう感知して、慌てて離れるなのは達……

それは、幸か不幸かなのは達の近くに落ちてきた……

―ドツシイインツ!!!

大きな音を立てて落ちてきたソレ……

ソレを見たなのは達は、驚きで目を見開いていた

「な、なんやこれ……?」

「……魔物?」

「へ、地球にもこんなのいるの?」

ソレ……

様々な虫の特徴が混ざったような、おぞましい見た目の生き物を見て驚く三人……

しかし、三人はさらに驚くことになる……

—最初は、グー……!!

『へ?』

空から聞こえた、そのかけ声……

ソレを聞いた三人は、上を見る……

そこにいたのは……

—ジャン、ケン……!!

「あれって……」

「な、何で空から……?」

「新くん!」

凄まじい速度で落ちて来ていた、新がいた

「キィィックッツツ!!」

彼は目に見えないながらも、なのは達も感じてしまう凄まじい力を蹴りに込め、生き物に落下の勢いを混ぜて放ち、頭を踏み潰してしまった……

ソレを食らった生き物は、ピクピクと痙攣した後動かなくなり、光の粒子となって新のそばを漂っていた顔の掘られた南瓜に吸い込まれていった……

「……よし、俺の八割分ゲット……!!」

—やっぱり、共食いさせると強くなる分オーラの所得量が増えるな……

嬉しそうにそう言う新……

どうやらなのは達に気づいていないらしい……

ソレを見たなのは達は、お互いに目配りすると頷き、話し掛けるために新のもとに向かうのであった……

十一話：戦闘・前

「ドツ、セイツ!!」

—ズドンツ!!

モンスター具現から約13分……

新は今、モンスターを一体、撃破したところだった

「一体に付き約十三分……移動時間も含めれば……一時間以内は間に合わないか……!?!」

—兎に角、近くにいないか探さないと……!!

新の発、死者と生者の殺しあい（ハロウィン・パーティー）で生まれたモンスターは一時間その展開された円の中でしか動くことが出来ない……

そのため、一時間は周りに被害を与えない

しかし、一時間過ぎれば……

—急がないと……!!

そう言いながら、死者と生者の殺しあい（ハロウィン・パーティー）とは別に円を行う新……

「残りは四体……！一体は近い!!」

そう言うと、その一体の元に向かって駆け出していった……

「いたー!」

オーラの放出による高速移動も行ったお陰だろう……

五分も経たない内に目的のモンスターの元に到着した彼は、モンスターに目を向ける

「ベースは蜘蛛……地面に巣を張ってるってことは待ち伏せ型か……?」

—羽根が少し気になるけど、動かないところから考えると、飛ぶのは殆ど無いかな?……なら

「ひとつ消費しちゃうけど、別にいつか」

蠓螂の腕に蜻蛉を思わせる羽……

そしてネズミの頭をもった蜘蛛のモンスターとまあ、絵にしたらト

ラウマ unavoidable それを見てそう判断した彼は、少し遠回りして背後から飛びかかる……

その手には白いバットがあり、そばには顔がついた南瓜型のろうそくがフヨフヨと浮かんでいた

「靈魂の蠟燭（ハロウィン・キャンディ）、点火」

それに自身のオーラを流す新……

それによって蠟燭に火が灯る……

「その悪戯は魔法の如く（トリック&トリート）」

そして、蠟燭が新の持つ白いバットに纏わり付く……

新の発のコンセプトは、オーラのかき増し……

しかし、その一方でもうひとつある

それは、” 様々な発を即興で作りに、使い捨てる感覚で使う ” というもの……

魂の提灯（カボチャランタン）に貯めていたオーラを消費して、発を作り使用するというものである

その悪戯は魔法の如く（トリック&トリート）……

カボチャランタンにオーラが入っているときのみ使える、発を即興で作りに、操る技……

靈魂の蠟燭（ハロウィン・キャンディ）もその一つで、その効果は2つ……

オーラの保存と、コストに関わらず一つ消費することで創造した発を強化した状態で発動するというものである

いわば、念能力の元である

そして、新が現在作った発は……

「幽霊のお化粧（ゴースト・デコレーション）、大槍（ランス）」

自分の意思で様々な形に変わるオーラを肉付けさせるものである……

それを使って白いバットを巨大なランスにして

「だらっしやああっ!!」

ーグツシャアアッ!!

モンスターを上から串刺しにして倒してしまった……

「よし、一分以内、次！……？」

モンスターが光の粒子となって魂の提灯（カボチャノランタン）に吸い込まれるのを最後まで見ずに円を行い別のモンスターを探す新……

しかし、その動きが突如止まってしまう……

「……あれ？残り1？」

そういえば、さつきも俺一体しか倒してないのに四体だった……？

探知した数に疑問を持ってしまい、動きを止めてしまう新

しかし、其が悪かった……

―ドツ！！

「ツ!!？」

突如襲いかかった衝撃……

それをもろに食らった新は、息が出来なくなりながら吹っ飛んでいった……

十二話：戦闘・中

「ガ……ハアッ!」

凄まじい衝撃で弾き飛ばされた新は、かなりの勢いで木にぶつかったお陰で止まることが出来たが、息が出来なくなっていた

バツトも、落としてしまっていた…

「……ッ!」ヒュー…ヒュー…

肺にはいつていた空気が全部吐き出されてしまい、軽い酸欠状態になる新…

何とか呼吸を出来るようにすると、新は自身を轢き飛ばした存在を確認するために眼を”凝”らす

―カマドウマ、か……!

バツタを思わせる脚に団栗のような体…

それらをカブトムシを思わせる黒い甲殻で身を包み、頭部には立派な角を持ったモンスターがいた…

カマドウマ…

便所コオロギとも呼ばれるそれは、自然界の中では肉食昆虫に含まれている…

バツタのように跳び跳ねることで獲物を捕らえる習性を持ち、その跳躍力は木に留まった虫さえも捕らえてしまう…

そんな驚きの跳躍力を持つカマドウマだが、同時にその跳躍力を制御できないため、木や岩等に頭を強く打って死んでしまう事が多々ある残念な虫でもある…

そんな昆虫が、

「俺のオーラ量よりも多い……」

そのモンスターから漲るように溢れていたオーラを見て驚く新…

ハロウィン・パーティーのルールとして、モンスターの自身を形作るオーラ量は新の総合オーラ量と同じというものがある…

しかし、目の前のそのオーラ量は明らかに新よりも多かつた…

「……なにか穴でもあったのか……？」

戦闘時だというのに、ハロウィン・パーティーのルールを振り返る新……

闘った後にして欲しい

ーギギ……ッ!!

そんな新に向けてまた突撃しようとしているのか、身構えるモンスター……

そして

ードッ!!

凄まじい音を立てて地面を蹴り、新に向かって突撃してきた

「!?」

ヤバイ!?

新は向かって来るモンスターを見てそう思ったのだろう

とっさの判断によりそこから飛び退くようにはなれ、木の影に隠れ

る……

が、

ークルツ

ーダンツ!!

「はっ？」

空中でモンスターが身を翻して、木の幹に着地したのを見て固まってしまう

ーあれ?カマドウマってあんなこと出来たっけ?

ードッ!!

呆然とする新に向かって木の幹から飛び掛かるモンスター……

その突撃は、新が隠れていた木を粉碎してなお威力はそれほど衰えずに新を吹き飛ばしてしまった……

「グツフツ!?!」

咄嗟にバットで防ぐ事が出来たが強制的に移動する形になる新……

追撃を加えるために再び構えるモンスター……

「!……なら……!!」

何かを見て思い付いたのだろうか……

新は、痛い体に鞭売って新たにバットを構える……
そして、

―ドツ!!

再び突撃するモンスター……

その一方で

「飛び掛かるだけじゃあ……」

新は、バットを振るい

「芸がないぞ、この野郎!!」

自身の側に落ちていたランスを弾き飛ばした……

最初の衝突で落としていたランス……

それが新の側にあっただのである

お互い高速で、真っ直ぐ翔び合うモンスターとランス……

モンスターは、空中で姿勢を変えればするも、向きを調整出来ず、ラ

ンスもまた同様……

必然的に……

―ドツ!!

ランスがモンスターに突き刺さる……

が、それを顎で挟んで受け止めていた

「いや、可笑しくね?」

―明らかに知能高すぎだろう!?

それを見て思わず内心叫ぶ新……

まるで、学習してるような……??

そんなことを思う新……

だが、この後驚きの光景を目の当たりにしてしまう……

―ガリッ、バリッ……

「!?!」

モンスターが、ランスを食べ始めてしまったのである……

しかも、食べたことでなにやらオーラ量が増えている……

「……まさか、蠱毒の法と同じ原理……?」

呆然とした顔で呟く新……

蠱毒の法とは、古代中国において用いられた呪術である……

今でも中国華南の少数民族の間で受け継がれており、蠱道（こどう）、蠱術（こじゆつ）、巫蠱（ふこ）などとも呼ばれている

「へび、ムカデ、ゲジ、カエルなどの百虫を同じ容器で飼育し、互いに共食いさせ、勝ち残ったものは神霊となるためこれを祀る」というもので、これから毒を採取して飲食物に混ぜ、人に害を加えたり、思い通りに福を得たり、富貴を凶ったりすることである

新のハロウィン・パーティーにも類似したところがあり、その影響でオーラを食べる事で強くなるという性質を持つていても可笑しくはない……

「つまり、モンスターの数が減ったのもこいつが共食いしたことによるものか……」

共食いを行えたのは、肉食昆虫のなかでも積極的に補食に向かうカマドウマがベースになっているからだろう……

蜘蛛やカマキリなら同じようになるのは中々無い筈だ……

「……あれ？つてことはこいつ……？」

「オーラによる攻撃は駄目なんじゃね？」

その事に気付いた新は、冷や汗を流し……

モンスターはモンスターで、再び新に狙いを定めるのであった……

十三話：戦闘・後

―タベタイ……

ソレは、腹をすかせていた……

長い間、狩りを失敗してしまい、食べる機会が無かったから……

―タベモノ、ドコ……？

ソレは歩く、食べものを求め、只管に……

しかし、ソレは才能がなかったのか、運が悪かったのか……

むしろ自分が食われかけるわ逃げられるわで、全く食べ物にありつけなかった……

ソレは、他のモノからすれば知能はあった……

つまり、死にたくないという生存欲求も強く、ソレ特有のジャンプ力も勢い余って死にたくないという理由から十全に発揮されず、食べられそうになったときも逃げることを優先してしまっていたからだ……

しかし、ソレに変化が起きたのは、それからしばらくしてからだった……

―タベモノ……？

ソレが目にした、それは食べ物の集まりだった……

大きな木から出てきている液体……

それを食しに来た、様々な生き物達……

それは、ソレの意識を食べることのみに向けることに十分だった……

―タベモノ……

ソレは始めて、死ぬことを厭わずに、跳んだ……

―タベモノ……！

ソレは、その気になれば自身の体長の数十倍の高さまで跳べるとい
う……

しかも、ソレは空腹の余り無意識にかけていたリミッターも生存本能と共に捨てていた

その跳躍力も凄まじいものとなっていた……

ベタイ

そして、その強い意思を、意識を……

思いを残して、ソレは肉体を失った……

そしてこの数日後……

それは新たな肉体と共に目を覚ますこととなったのである……

「だああッ!?もう、一旦落ち着けよ!」

カマドウマ型のモンスターの突撃を、再び躲す新……

躲されたモンスターは再び木をへし折りながら止まり、新のほうをむく……

そして再び突撃し、また躲す……

これの繰り返しだが、五分以上続いていた……

「もうすぐ三十分……!!ギリギリ俺と同量……!!」

—そろそろ、攻める……!

そう思った新は、今度はオーラを纏っていない木すらも食べ始めた
モンスターを睨むと、接近する……

ジャンプによる突進しかしてこないのを見て、離れるのは寧ろ危険
と判断したのだ

「さい、しよはグー!!」

—ジャンプさせなければ危険はない

そう判断した新は、掛け声と共にバットをもっていない、右の掌を
握り拳にして全てのオーラを込める……

”硬”……

生み出したオーラ全てを一点に集める技である……

集めた場所以外は防御力が皆無だが、それを差し引いてもお釣りが
来る……

それを

「ジャン、ケンツ!!」

—ドツ!!

モンスターに撃ち込む

モンスターはそれを危険と判断したのか、オーラを放出する事で防

ごうとするが……

「(甘い!!) グー!!」

新の方が上手だった

撃ち込んだ拳を中心にオーラをモンスターに注入……

さらにそのオーラに干渉してモンスターを高速回転させながら、上空に飛ばす……

それにより起きた風は、竜巻を彷彿とさせた……

「よし、あとは）……魂の飴細工(ソウル・クレー)」

落ちていったのを確認した新は、今度はバットを金属ブーツに変えて両足に装着した新……

「最、初は……グー!!」

そのまま両足のブーツからオーラを放出させて跳躍、モンスターの落ちた場所を確認すると

「ジャン、ケンツ!!」

今度は両足をモンスターに向けて両掌からオーラを放出させてモンスターに向かう

「キイイッククツツ!!!」

その言葉と共に、頭を踏み潰してしまった……

もろに食らったモンスターは、ピクピクと痙攣した後動かなくなり、光の粒子となって新のそばを漂っていたカボチャノランタンに吸い込まれていった……

「……よし、俺の八割分ゲット……!!」

勝利の余韻に浸かる暇無く、カボチャノランタンに入っていたオーラ量を感じて確認した新は、そう言っただけで内心計算する

「俺が消費したオーラは、ソウルキャンディ一個分と、自前のオーラ七割……ソウルキャンディは俺の総合オーラ一つ分だから、今回得たオーラは、大体ソウルキャンディ2個分、ソウルキャンディ一個分の黒字」

よっし!!とガッツポーズした新……

今回、ハロウィンパーティーには蠱毒と同じ効果もあると解った為、かなりの収穫だった

―明日は学校も休みだけど、そろそろ帰ろう……

一通り、落ち着いた新はそう思つて帰ろうとしたら

「あの……？新君……だよね？」

突然、声をかけられてしまった……

それを聞いた新は固まる……

いや、正確には、その声を聞いて固まった

「(……へ、嘘……？何でいるの……？)」

ギギギ……つと油の切れた機械のような動きで振り向く新……

そこにいたのは……

「えつと……ちよつとお話したいんだけど、良いかな？」

この前、仲良くなつたばかりの少女……

高町なのは他に、フェイトとはやてもいたのであつた……

十四話：交渉

「(ちょっと待て!?なんでここになのはがいるんだよ!?)」

ハロウィンパーティーによる鍛練を終えて、帰ろうとした新は、自分に声をかけてきたなのはに驚いていた……

まさか、誰かの変装か?と、思うもそれは違うと言うことがなのはから垂れ流されているオーラを見れば解るし、何よりなのはのそばにはフェイトとはやてがいる……

三人も変装した姿でここにいること事態が可笑しいと判断した新は本人だと判断した上で、返答することにした

「お話しと言うと、どのようなお話ですか、高町先輩?」

敢えて警戒心を見せながら問いかける新……

それを聞いたなのは、少しオロオロしたような様子になる……

「えっと、さっきの怪物さんの事とかかな?」

「……あれは俺が鍛練のために召喚したものです。周りには被害を与えないようにしているのよ」

「「召喚した!?!」」

新の答えにたいして驚いた顔になるなのは、フェイト、そしてはやて……

「ちよ、ちょっと待って!?新君、召喚魔法使えるの!?!」

「!?はやて、ストップ!!」

「はやてちゃん、静かにして……!!」

——今の時間夜だから!?真夜中だから!?声響くから!?それに魔法のことは秘密事項だから……!!

驚きのあまり、大声で問いかけたはやてを止めるために動くのはとフェイト……

原作知識を知ってる新からすれば、魔法などの事を出すために話題を掘り下げる手間がなくなって万々歳である

それを聞いた新はすかさず

「……魔法?」

魔法のことを聞く……

それを聞いたなのは達は

「「あ……」」

固まってしまおうのであった……

「成る程ね……」

場所を変えて、近くにあつた自販機で買ったジュースを飲みながらなのは達から説明を（といつても、なのは達が魔導士であること、とある組織に所属していることのみ）受けた新は納得した振りをする……

「つまり、先輩達は魔法を使う人たちの集まりに所属していて、その組織でおれの事が話題になったと……」

「うーん……厳密には、偶々新君が関係しているかもしれないって事だったんだけど……」

「まさか、本当に関係していたなんて思わなかったよ……」

「そうやね……しかも、召喚したものと戦っていたってなったら尚更驚きしかあらへんわ……」

あはは……と、苦笑するなのは達……

ここで、なのは達からも質問が新に向けられる

「それで、新君さっきの生き物？を召喚したって言ってたけど、新君は魔導士なの？一応魔力はあるみたいだけど……」

「いや、俺は魔導士じゃないですよ……念能力者……超能力のようなものを使うと思ってくれれば」

「？超能力……？」

はやてが興味津々という目を新に向ける……

読書やゲームなどファンタジーなものが好きなのは原作の知識で知っていたので可笑しくはない

もうここまで言ってしまったら全部言ってしまうおうか？

そこまで考えた新は、詳しい説明をするために条件を出すことにした

「もう夜……というかそろそろ夜明けになりますし、詳しい説明はまた後にしませんか？……そろそろ家に戻らないと、家族が心配します

し」

「うちの住所知ってるんだし、一度帰っても問題はないですよね？
そう補足して言う新……」

それを聞いたなのは少し待っていて欲しいとお願いして一度席
を外す……

その間、新は残ったフェイトとはやての二人と会話をするのであつ
た……

「お待ちせ〜」

数分後……

上と連絡を取っていたなのは戻って来る

「リンデイさん……あ、私たちの上司に当たる人んですけど、そう言う
ことならOKだつて」

「そつちの都合の良い時間に合わせるつて言つてたよ？
なのはがそう説明してくれる……」

本来なら、そこまで融通は効かない筈なのだが、新がなのはの幼い
頃から仲良くしている子である事と、リンデイの人柄により、ある程
度融通が効くようである

「あ、じゃあ……お昼頃……そうだな……何処か集まれる場所は……」

「翠屋はダメなの？」

「姉ちゃんがバイトしてるところだし、家族にはいまはまだ秘密にし
てるからダメ」

「なのはの提案を駄目だしする新……」

話し合った結果、集合場所は海沿いにある公園……

そこにある休憩所ということになり、そのまま解散するのであつた
……

「(さて、帰ったらシャワー浴びて、カボチャノランタンにオーラを補
充……ソウル・キャデイも新たに作りながらどう説明するかメモ
……並列して作業すれば、少しは寝れるな)」

「念能力者だから、ある程度睡眠時間削れるけど、魔導士だったら
倒れてるな……」

そう考えながら、新は急いで帰宅するのであった……

十五話：説明（前）

「…………ふわぁ…………!!」

翌日……

そろそろお昼頃になろうとしている時間帯……

新は、自身は指定していた場所でののは達を待ちながら欠伸をしていた……

昨日、帰ってから念能力についてどこまで言っても良いか等をメモを取りながら考えていたらしいの間にか朝に……

そのため、徹夜になってしまったのである……

「少し早く来すぎたかな……」

——でも仮眠して寝坊しようものなら自分で指定したクセに、何て思われちゃうし……

まだ誰も来ないせいで気が抜けて眠くなりそうになりながらも待つ新……

お昼じゃなくて夕方にすれば良かったかな……

と、思っていた時だった

「…………来たな」

新が座っている、休憩場所からはなれたところ……

そこに五人と少なくとも気配が現れたのを”円”で認識した新……

誰が来たのかそのまま少し考察する

「五人のうち三人は、なのは、フェイト、はやてで残りの二人はクロノとリンディ……実際にあった三人は解るけど、残りの二人は……？」

”円”により感知した体格で五人のうち三人がなのは、フェイト、はやてであることを認識した新……

そして、感知した方からなのは達三人と、残りの二人こちらに向かって歩いて来るのが見えた……

「…………ああ、あの二人か……」

遠目から見て、原作知識がある新は誰が来たのかがわかり納得する

一人は、自分より年が上……

「だいたいなのは達位だろうか？」

そのぐらいの背格好をした黒い服に身を包んだ少年

……
そしてもう一人は、緑色の髪をポニーテールにした、大人の女性

新は立ち上がり頭を軽く下げるとそれに気づいたのか向こうも頭を下げた

そして、向かい合う新となのは達……

「こちらの都合に合わせていただき感謝します……改めまして、固導新。念能力者をやっています」

「ご丁寧ありがとうございます。時空管理局巡察艦艦長でフェイトの母のリンディ・ハラオウンです」

「時空管理局執務官のクロノ・ハラオウンだ……フェイトの兄だ」

「改めて、時空管理局所属の魔導師の高町なのはです」

「フェイト・テストアロッサ・ハラオウンです」

「八神はやてです、こちら二人も管理局に所属しとるで？」

軽く自己紹介をしてベンチに腰掛けて向かい合う……

恐らく、ここでの話し合いによっては自分のこれからが決まる可能性がある……

そう感じた彼は、相手の一言一言に集中しながら、見えないところでスマホのとある機能を起動させた……

そのタイミングで、クロノが問いかけた

「では早速だが本題に入ろう。昨日君が言っていたことをこちらはまだそんな理解していないからね」

そう言いながら、クロノは一枚の写真を取り出す……

写っているのは、蛇の体にカマキリの両腕を生やしたモンスターと、それに対してカボチャのランタンを浮かばせながら身構える新である……

「……えっと、戦ったのは覚えてるけど、いつのやつだったっけこれ？」

其を見た新は思い出そうとする……

其をみたなのはがフォローしてくれた

「えつと、2、3日前だよ?」

「あ、そうだった」

其を聞いた新が思い出したよ、と手をたたく

リンデイが其をみて話を進めた

「……じゃあ、この数日の怪しげなもの音は貴方の仕業なのね?」

「ええ、鍛練の為に召喚して戦ってました」

「そう、そこだこちらが聞きたいのは!」

新の言葉を聞いたクロノがテーブルを叩きながら問いたです……

「召喚……と言っていたが、君のいた痕跡からは僅かな魔力があった

……召喚魔法を使ったということ、君は魔導師なのか……!?!」

—それなら、なぜ魔法を使えるんだ……!」

堰を切ったかのような勢いで問いかけ続けるクロノ……

彼を宥めるのに相当な時間がかかったのは言うまでもなかった

……

「済まない、取り乱していた……」

数分後……

少し恥ずかしがりながらも先ほどの暴走(?)の謝罪をするクロノ

……

「ごめんなさいね?……実は、昨日なのはさん達から話を聞いて、かなり取り乱していたのよ……」

そんな息子の姿をみながら、苦笑しながら謝るリンデイ

「?どういうこと?」

新の疑問に答えたのは、はやてだった

「ほら、新くん言うてたやん?召喚した?って」

「……言ったね、そう言った方が分かりやすいと思ったからそう言ったけど」

其となんの関係があるの?

と、不思議そうな顔で問う新……

「クロノがさつき言ってたけど、新が鍛練をして居た場所で魔力の痕跡があったんよ」

「……？」

まだ理解できてない新……

つまりな？

と、はやてがさらに話す

「新くんは、デバイス……こつちでいう魔法の杖な？……其を使わずに召喚魔法なんて難しいものを使ったなら、是非とも管理局にスカウトしたいって息巻いていたんよ」

「召喚魔法って使い手が少ないからレアスキル……特殊能力扱いされているからね……」

フエイトも続かなかたちで話す……

それを聞いて、そんな設定もあったな……

と思い出す新……

だが

「……正確にはアレ、召喚じゃないんだけど……」

『へ？』

その新の言葉に、なのは達は目を点にしてしまったのであった……

十六話：説明（後）

「……って訳です」

具体的には召喚ではない……

新のその発言に目を点にしたなのは達は、新からの詳しい説明……

”念能力”というものの存在を聞いて頭を抱えていた

「……すまない、整理させてくれ……」

「どうぞぞ？」

頭を一頻り抱えた後、クロノの問いにそう返す新

そして、クロノが整理する目的で新に確認を行う

「まず、念能力というのは、生命力……いわゆるオーラを操る能力のことで、魔法とは違う……こちらでいうレアスキルのようなものと」

「まあ、俺……私？僕か？……僕はレアスキルっていうのは良く分からないからなんとも言えないけど、そう思ってくれても良いと思うよ？」

「で、その念能力はその人が作りたいたものを作ることが出きる」

「うん、念能力はインスピレーション……発想力が物を言うから」

— 因みに、俺が昨日戦っていたのは、周りの昆虫とかの亡霊をより集めて作ったモンスターだよ？

その言葉に新はそう言いながら頷く

そして、クロノは自身の中で……

そしてそれはリンディやなのは達も同じように一番問題になって
いることを尋ねた

「そして、その念能力というのは……誰でも出来る……つまり、
魔力の持たない、又は少ない一般人も使うことが出来るということか
？」

「うん、まあ、習得スピードや肉体の強化は個人差があるけど」

それを聞いて再び頭を抱えるクロノ……

「つまり、”自分が欲しいと考えたレアスキルを、魔力を用いずに作る
ことが出来る能力”……」

「魔法やん、もうそれ魔法やん……」

「下手したら魔法よりもすごいかもしれないの……」

フェイトとはやて、そしてなのはがそれを聞いて呆然とする……

そして、リンディは神妙な顔で新を見ていた

「あの……何か？」

その様子に混乱する新……

その問いに答えたのは、リンディだ

「……新しく」

―管理局に入ってみない？

唐突とも言える管理局へのお誘い……

そしてを聞いた新は

「……へ？」

目を点にするのであった

「あの……いきなりどうしたんですか？」

突然の勧誘に驚いてしまった新は、リンディに問いかける

それにたいして、リンディは説明を行う

「まずね？管理局って”魔法至上主義者”の考え方を持つ人が少ないけどいるの……それも上層部のなかでも古株に」

「？……”魔法至上主義者？」

はじめて聞く言葉に新は頭に？を浮かべる

そんな彼を見たはやてが説明をしてくれた

「魔法以外のどんな力をも格下として見る者達の事や」

「犯罪組織とかに多いんだけど、管理局にも少数ながらいるの」

なのも補足する形で説明する

リンディは続ける

「その人達のせいで、ある問題が大なり小なり起きてるのよ……」

「ある問題……？」

それを聞いて、新はふと別の漫画や小説のことを思い出す……

それは、このリリカルなのはの世界と同じように魔法のある世界

……

その世界の主人公は、とある理由で不遇な扱いを受けていた……
その理由は……

「……魔力量による差別……?」

そう、先天的な魔力量の少なさによる迫害である……

魔法こそが至上と考える人達は、たくさん魔法を使える、又は強力な魔法を使える人程強いという短絡的な考えを持つ……

そのため、少ない魔力しか持たない者を見下す傾向にある……

それを聞いたリンディは目を見開くと共に感心した

「正解……表面化にはなつてないけど、それが起きてるのは確かよ」

「確かに、話を聞くと魔法がお手軽な武力って風習があるように聞こえますもんね……でも、それなら拳銃とかの方が楽じゃないですか？」

—だって、お金と材料があれば簡単に手に入るんですから

そう不思議そうに言う新

確かに、武力……というより戦力なら拳銃等の武器を魔導士でない人を持たせれば良い……

しかし、

「それを」魔法至上主義者、の人達が認めようとしなのよ……」

「負のスパイラルになつてますね……」

リンディの言葉を聞いて脱力する新……

つまり

魔法至上主義者による魔力量の差別

← 魔力の少ない、又は持たない一般人が大なり小なり迫害される

← 感情が抑圧される

← 拳銃などの兵器を手にする

← 感情爆発

←

←

←

←

←

テロ化する

← 上層部がそれを恐れて兵器を手にすることを禁止する

← 魔法の価値が上がる

← 魔法至上主義者が増える

← 魔力の量が多いほど強く、偉いという考えになる
という流れが出来ている……

「そこに、新くんが持つ”魔法のようで魔法ではない能力”……念能力の存在が公にされたらどうなると思う?」

それを聞いたなのは、フェイト、はやての顔が青くなる……

「……迫害されてきた人達がこぞって欲しくなる、身に付けたくなくなる……」

前世の記憶がある新も、そうなることを予想した

そして……

「そんな人たちがそんな力を持ったら、テロ処じゃすまなくなるな……ましてや、念能力っていうのは認識が出来ないんだろう?」

復活したクロノが問う……

「念能力……というよりオーラを認識できるのは同じ念能力者だけだよ、例外はあるにはあるけど、少ない」

それに対してそう答える新……

同じ念能力者だけにしか認識できない……

つまり

「魔法至上主義者の人達は認識できないから認めようとしないうしろ、下手したら狙われる可能性も……」

「……ねえ、それヤバない?」

顔を引くつかせながら呟く新……

つまり、下手すれば自分達の不遇な扱いを終わらせられる存在になるかもしれないと考える人達と、自分達の地位を脅かせる存在を認め

たかない人達に狙われる可能性が出来るということである

普通、そこまで話が大きくなります？

そんな彼の心情を理解したリンディが話し始める

「だから、念能力のことが公になる前に新くんを管理局に勧誘してるの」

—丁度、新くんは魔力持ち……魔導士としての才能もあるし、悪い話ではないと思うわよ？

そう説明するリンディ……

つまり、管理局に先に入れてしまい、念能力のことが公になっても管理局の戦力、または監視下においてしまえば最悪命を狙われることがない……

そう思っているようである

しかし……

「(それ、下手したら捨てゴマにされる可能性がありますよね？……上層部に……)」

内心でそう考える新……

無茶苦茶な任務を押し付けて、自分達は高みの見物……

成功すれば魔法至上主義者に狙われ、失敗したらミスをおかしたただなんだといわれて処分される……

八方塞がりである

いや、リンディ達もそう考えて対策はとってはいるだろうが、それでも心配である……

「と、兎に角！新くんの存在は伏せておくから考えておいてくれないかしら？」

そう笑顔で言うリンディに何も言えなかった新であった……

十七話：嵐前静寂

念能力をリンディたちに説明した事で、管理局に入らないかと勧誘された新……

その日の夜、彼は自室でノートに何かを箇条書きの形で書いていた……

「うくん……」

書いていたのは、”管理局に入った場合のメリット、デメリット”……

何か迷ったりしたら箇条書きでもいいから書いて、どうすればいいかを考えるようにしている彼は、そのメモを見て、こう呟いた

「……デメリットが多すぎないか……?」

そう言った新の視線の箇条書きには、こう書いてあった……

メリット

- お給料が貰える（其も公務員レベルの）
- 原作キャラと仲良くなれる、または交流を持てる機会が増える
- 自分には魔導士としての才能があるとの事で、デバイスをゲット出来るかもしれない

デメリット

- 休みが不定期（その間で勉強と両立しなければいけない）
- 任務が危険なものが多いかもしれない（死ぬ危険性あり）
- 上層部に目の敵にされる（念能力のせい）
- 下手したら家族に危害が及ぶ
- 文化的価値観が違うかも
- 字や言葉が違う可能性があるため、詐欺に合う確立がぐんと高くなる

「……なんでデメリットが倍はあるんだよ……!」

思わずそう言ってしまう新……

因みに、新が思い付く限りのデメリットのため、下手したら其以上

のデメリットがある可能性が高い……

常に最悪を考えつつも、最善の行動を取ることを信条としている彼からしてみれば、多すぎるデメリットである……

「……現状では入るメリットが小さすぎるんだよなあ……」

そりゃあ、デメリットがメリットの倍あるんだから当然である

「取り敢えず、今回は保留にして貰うしかないな……」

そう言いながら、箇条書きしたページを破り、オーラを纏わせる

……

瞬間、その紙は燃えてチリ一つ残さずに消えた……

「(オーラの性質変化上手くいくようになってきたな……)」

——とそろそろ飯の時間だ

そんなことを思いながら、部屋を出るのであった……

「……ということなので、誘ってくれたのは嬉しいのですが……」

「そっか……残念だけど、仕方がないね……?」

「せやなあ……うちらの場合は、事情が事情やったし、新君みたいに入らなくても問題ない、見たいな理由じゃなかったしなあ?」

「すみません……まあ、進路の一つとして考えようと思ってますので……」

「じゃあ、入りたくなったら言つてな?……うちらが推薦するから」

翌日……

すっかり恒例となった、屋上でのお昼休みで勧誘を断る旨を伝えた新に、残念そうな顔でそう言うフェイトと、納得したような顔になるはやて……

そして、事情を聴いていたアリサとすずかが興味深いというような顔で新を見ていた

「……にしても、念能力ねえ……?」

「魔法じゃないのに、魔法みたいなことが出来るって新君凄いなだね?」

——おまけに、魔力もあるんでしょ?

と、興味津々とばかりの視線を向ける二人に、思わず苦笑してしま

う新……

「一応、持つてはいますけど、魔導師になっても大成しないと思いますよ?。」

「?なんでよ?。」

「念能力者としての戦い方しかやつたこと無いんで……」

「おまけに、デバイス?つてのがないと魔法つて出来ないみたいですし……」

と、それらしい理由を話す新……

しかし、ここではやてが話に入る

「?あれ?……ユーノ君はデバイスなしで魔法使つてたへんかった?。」

「ユーノの場合は、情報処理能力が高いから出来たんだよ?……普通は出来ないんだつて言つてたよ?。」

「確かそうだったよね?なのは

フェイトがそう言いながらなのはに同意を求める……

しかし、

「……………」

なのはは其に気付かず、どこか上の空だった……

「なのは?。」

『?。』

フェイトの言葉に、新達も首をかしげる

「……………」

「なのは?。」トントントン

「ふにやつ!。」(ビクツ!)

名前を呼ばれながら肩を軽く叩かれて、やっと反応したなのは……

その顔はええ?何?と混乱していた

「どうしたの、なのは?……なにか考え事?。」

「う、ううん、何でもない」

「ごめんね、フェイトちゃん?。」

『にやはは』とそう言つて苦笑しながら謝るなのは……

「どうしたのよ?最近ボーっとしてる事が多いわよ?。」

「何か悩み事でもあるの？なのはちゃん」

其を見たアリサとすずかが、なのはに問いかけ、

「な、何でもないよ、有り難うアリサちゃん、すずかちゃん」

其を聞いたなのはがそう返す……

「……………」

其を見た新が、何か違和感を感じたのか首をかしげる……

―あれ、何か大切なことを忘れてるような……………？

「??新君、どうかしたん？」

其を見たはやてがキョトンとした顔で問いかける

「！いえ、何でもないです」

そうか？と返すはやて

そう言ってる間にも、いつの間にかなのは達は放課後の予定の話をしていた

「ねえ、今日の放課後どうする？」

「あ……………ごめん、今日任務があるんだ……………」

「なのはちゃん、最近お仕事多いよね？」

「大丈夫？……………無茶してない？」

「だ、大丈夫だよー」

平気平気！と元氣アピールするのは……

と、ここですずかが新に話しかける

「新君は今日予定ある？……………もしないなら一緒に遊ばない？」

「念……………だっけ？その鍛練ぐらいしか今のところ無いんでしょ？」

すずか、アリサがそういう……

因みに、すずかとアリサも新の念能力のことは先ほど話したので知っている……

二人とも身に付けたいというような顔をしていたが、新はそれに気付かない降りをしてやり過ごしていた

「ああ……………すいません、今日の放課後、ちよつと予定が……………」

そう言いながら申し訳なさそうな顔をする新に、二人は

「そっか……………それなら仕方ないね？」

「そうね……………また誘うから、そのときは開けときなさいよ？」

残念そうにそういう二人にすいません……と謝る新……
其を見たなのは、質問した

「因みに、予定って？」

その問いに、新は

「……宝さがし」

と、遠い目で答え、それを聞いたなのはたちは、
はい？

という顔になるのであった……

十八話：事案

「……あつた……!!」

放課後……

家の中にある物置の中でそう言いながら何か小さくて細長い木の箱を片手に持ちながら這い出る新……

「へ？嘘!?もう見つけたの!？」

それを聞いた、物置の外で新が出した荷物を整理していた早妃が驚いたような声で問いかける……

聞き付けた母が夕飯の支度を一度やめて二人の元へ駆け付ける

「あつた？」

嬉しそうな、不安そうな声で聞く母に、新はこれで良かった？と聴きながら差し出す……

「そうそう、これよこれー!」

——こんなすぐに見つかるなんて思わなかったわ〜!

と、言いながら箱を開ける母……

実は、次の休みに探すことになっていたのだが、新が”円”で探知できるかもしれないと思い、放課後軽く探してみると言ったのである
意外と奥にあつたため、少し時間がかかったが、それでも早い方である

「?……うわあ、綺麗……」

中には何が入ってるんだろう?と思った早妃が開けた箱を見ると、そう呟く……

そこには、綺麗な簪が収められていた:

形状から見ると、一本挿しと呼ばれる髪を束ねる用の物で、玉簪と呼ばれるタイプの物らしい:

玉と呼ばれるところには青い瑪瑙が使われており、涼しげな印象を持たしている……

装飾がそれしかないシンプルな物だが、その分普段使いがしやすいそうではある……

「これね、私のお母さんがお父さんにプロポーズされたときに渡され

たものなんだって……」

「指のサイズがわからなかったから、君の髪に合いそうな簪にした、今度一緒に指輪を買いに行かないか？……って正直に言ってきたから、困っちゃったわ……って笑ってたのよ？」

「そう言いながら、愛おしそうにそれを撫でる母……」

「婚約指輪ならぬ婚約簪ってこと？」

「お爺さんって随分ロマンチストなんだね？」

と、目をキラキラさせながら言う早妃……

「(かつけえな、お爺さん……)」

それを聞いて新は感心する……

簪は江戸時代から「あなたを守ります」という意味を持ち、男性が好きな女性に対してプロポーズや告白をする際の贈り物としてよく選ばれていたものである……

一生を共にしたい女性にお守りとして贈ったり、魔除けとしての意味も込められている、女性がもらってうれしいロマンチックなギフトだ……

そして、青い瑪瑙……

ブルーメノウは古くから、明るい未来を導いてくれる幸運のお守りとして古くから重用されている……

古来においては神の石とまで呼ばれていた……

……あれ？お爺さんって確か……

「……もうすぐお父さんたちの命日だから、これを持って行ってあげたいと思ってる……」

あ……

それを聞いて、新と早妃は察する……

そう、当の母の祖母は既になくなっていて……

だからだろう、簪を探したいと言っていたのは……

「……さー夕飯、作ってしまいましょう！」

一頻り思い出に浸った母は、簪を箱ごと柵に大切にしまいながらそう言っただけ……

「！姉ちゃん、手伝いに行っただけ……これは俺が片付けるから」

「?そう?…わかった」

それを見た新は早妃にそう言って、それを聞いた早妃は母の元へ向かう……

「……さて、片付けるか……」

それを見送った新は、荷物を整理し始める……

使う機会がなさそうなものは奥に、近いうちに使いそうなものは手前に置くように……

そんなときだった

「……ん?」

ふと、何かが目に入った新……

それは、一冊の本だった……

「……こんなのも持ってたのか?」

そう言つて手に取つてまじまじと見る……

表紙には字が書いていないが、金属製の十字架がはめ込まれている

…

又、勝手に開かないようになぐまでついてアンティーク感のみならず、高級感溢れるデザインの物だった……

—あれ?このデザイン、何処かで……?

それを見て首をかしげながら思う新……

その時だった

—見つけた……

「!?」

突然の声に固まる新……

「新く?何か食べたいのある?…つてお母さんが」

そのタイミングで、一度戻ってきた早妃……

—やつと、見つけた……

「!?んなつ!?」

その声と共に、新の足元に魔法陣のようなものが出てくる……

「!?……新っ!?」

「姉ちゃん、来るな!!母さんと呼んできて、なんかヤバイ!!」

そう言いながら被害を自分だけにとどめようと近付こうとする姉

から離れようとする新……

そして、光が強くなり早妃は目を守るために瞑り、しばらくして開けると……

「…新？」

彼の姿は無くなっていた…

十九話：墜落、救護

—ボフツ!!

「!?……冷たっ!!?」

光に飲まれ、意識を落としそうになった新は、突然の冷たさに襲われて驚きながら飛び上がる……

ひゃっこいひゃっこい……!と騒ぎながら立ち上がった彼は、自身の周りを見て驚く……

「……ど(っ)ど(っ)ど(っ)？」

そこは一面が雪に覆われたところだった……

「(いや、今雪の降る季節じゃないよね……? なんならもうすぐ夏休みだよな?)」

そう思いながら辺りを見渡す新……

因みにこの作品のなかでは6月の下旬……

もうすぐ夏になるところである……

つまり、服装も其なりに薄くなっていると言うことであり……

—ヒュウツ

「!?寒っ……!?」

風の運んできた冷気に体を震えながら、辺りを見渡すのをやめて自身の影から魂の蠟燭(ソウルキャンディ)を一つ出す……

そして、それにオーラを流して火をともし

「えっと……白い羽衣(グレースコート)」

そう言った瞬間、魂の蠟燭(ソウルキャンディ)は形を変えていきながら新に纏わりつく……

「よし、こんなで良いだろ」

そして、それは白いコートとなった……

「……いざとなれば転移系の発を作ればなんとかなるだろうし、見て回るか……」

そう言った新は、人がいそうな場所に向かおうとする……

その前に

—コツンっ

「?…あつ…」

落ちていた本が足に当り、それを拾う…

自身をこんなところに飛ばした本だ

警戒すべきなのだろうか…

「…手がかりみたいなものだし、持ってくるか」

そう言いながら拾い、新は歩き始めるのであった…

「?…なんだ?」

歩いて数十分…

何やら空が騒がしいことに気付いた新は上を見上げる…

そこには

「…へ?」

銀色のボディを持った大きな羽虫のような機械と戦う少女の姿が見えた…

その少女は、新がよく知ってる人物…

「高町さん!」

高町なのはだった…

「(そういえば、今日任務があるって…) ん? ちょっと待って…?」
ふと、なにかを思い出しそうになる新…

「(雪の降る世界での任務、様子のおかしいなのは、そして虫のような機械と戦闘…) ……これって…」

そう呟いていると、その子が一気に羽虫との間合いを詰めるように飛行する。だがそれに合わせるように羽虫は身体から板状のアームのようなものを二つ出現させ、それを一度なびかせた後にはめがけてそれぞれ間を置きながらも高速で伸ばしてきた

「っ!」

それに対してその子は直進を止めて上昇をかけ、一本目を回避する。そしてそのまま上昇を続けて二本目も回避しようとするが――

「なのは! 危ない!」

「きゃっ!」

突然、飛行速度が減少しその動きがゆっくりとしたものになってし

まう。その為本来なら回避できたはずのアームを避ける事が出来ず、結果腹部にアームの一撃を受けてしまう。一撃を受けた女の子は飛行状態を維持する事が出来ずに地面へと落ちてしまい、それが結果大きな隙となる

「おいなのはー！ 早くそこから逃げろー！」

明らかに動揺しているのが分かる声色の赤い服の子の叫びがその場に響くが、どうやらその子はすぐには動ける様子ではなく、その間にも羽虫は森から移動しながら先程は板のようだったアームの先端をとがらせて再度その子めがけて伸ばそうとする

それを見た新は、

「…思い出した…！」

—これ、なのはが墜落されたエピソードじゃん!!

原作知識のことを思い出し、なのはの元へオーラを広げながら走り出す……

—かかった!!

オーラを広げる……いわば”円”の範囲内になのはが入ったのを確認した新は、すぐに魂の蠟燭（ソウルキャンディ）を新しく取り出してオーラを流して火をともし……

そして、それを握りつぶして自身に還元し

「クツキースワップ!!」

—パンツ!!

手を柏手した瞬間、自身の体に強い痛みが走ったのだった

くなのは視点く

「(くっ……身体が……重い……)」

相手の攻撃を受けて地面へと墜落してしまった私は急いで再度空中へと飛び立とうとする。だけどいくら魔力を集中させて飛行魔法を使おうとしても上手く魔力を集中させる事が出来ずにもたついてしまう

「(確かにここ最近色々と魔法を使うのが難しくなっていたけど……こんな時に……)」

ここ最近、教導や訓練中にいつもの感覚で魔法を使おうとした時に上手く魔法が使えない時があった。それでも普通の時よりも集中して使えば魔法は使えていたので特に誰に相談する事なく過ごしていた

「ただ今日足をもつれさせてしまった時くらいから急激に身体が重く感じられるようになり、今に至ってはまともに魔法を行使することさえできない」

「(このままだと……攻撃されるっ)」

視界の片隅に私を墜落させた羽虫が現れたかと思うと、先程のアームをゆっくりと振りかぶって再度私に向けて振り下ろしてくる。その一撃は確実に私に向かってくるのが分かり、私はいずれ訪れるだろう痛みを耐える為に身体に力を込めた

「けど、いつまでたつても来ない痛みを不審に思い、目を開けると……」

「……………」

何故か、私の離れたところで機械のアームに貫かれた新君が……

ここにはいないはずの、私の友達がいた……

くなのは視点終わりく

二十話：戦闘

クツキースワップ……

ハロウィンが終わった時期にカナダやアメリカで行われるクツキースワップを交換し合う会である……

そのイベントがあると言うことを知ったとき、新の頭のなかである漫画のキャラクターの能力を思い出したのである

そして、作り上げた発が”ここには貴方、そこには私（クツキースワップ）”である

簡単に言えば、対象と対象の位置を入れ換えると言うシンプルな能力である

シンプルである分、誓約（ペナルティ）なしの

制約（ルール）が3つしかないというコストパフォーマンスの良い能力なのだ

その制約（ルール）の一つに、こんなものがある……

ー入れ換えた対象同士は、対象同士の地点から1メートルの範囲内ですれが起こる（ただし、余地のあるところのみとする）

つまり、将棋などのボードゲームという一マスずれるということである……

そしてそれは、

「あ、危な……!?!」

対象を、攻撃から助ける為に入れ換える時の回避に役立つということでもある……

ーくっそ……!?!少しかすった……!

脇腹にかすったことで白い羽衣（グレースコート）に血が染み込んでいくのを感じながら、自身をかすったアームから距離をとる新……

「なのは、大丈夫か!?!」

一方で、赤い服の子がなのはに近付きながら声をかける

その顔は慌てている様に見える

「う、うん……でも、新くんが……」

「!?!そうだ……おいお前！大丈夫か!?!」

なのはの声に新のことを思い出したのだろうその子が新に声をかける……

それにたいして、新は

「かすり傷だから平気！」

そう答える

実際かすり傷だし、この程度ならオーラを脇腹に集中させてしまえばすぐに治る……

しかし、向こうはそう思えなかったようで……

「血い出した奴が何言ってるんだ馬鹿!!」

赤い服の子がそう叫び新のもとに向かおうとする

しかし、

「くっそー！てめえら邪魔だ!!」

機械がそれを阻む……

しかも、不調気味のなのはを狙おうともしているので、動けなくなっているらしい……

「…ショット!!」

それを見た新は新しく魂の提灯（ソウルキャンディ）を4つ召還……

それらから遠隔兵器よろしく念弾を放って機械から伸びていたアームを壊す……

「ねえ、一応確認で聞くけど」

赤い服の子にそう言いつつ、自身に向けられている機械の攻撃を躲す新……

背後からの攻撃すらも避けている辺り、恐らく”円”を使っている

……

「この機械達って全部壊して良いの!?!」

その問いに答える赤い服の子……

先ほど機械を壊したことに驚いていたが、戦い慣れているのかすぐに落ち着き、答えてくれた

「敵だ！出来れば確保が望ましいけど、それが無理なら破壊ってことにしていた!」

「…わかった」

—じやあ、全部壊していいな

そう新が言った瞬間

「邪魔切り（ケーキカット）」

ソウルキャンデイの一つが砕けて、なのは達を囲んでいた機械全てが両断された…

「…は？」

それを見て固まるふたり…

そんな二人を無視して、新は魂の提灯（ソウルキャンデイ）を一つ掴んで握り潰す

それによって新のオーラがかき増しされた

「ほいほいほいほいほいほいほい!!」

多数の機械のアームが襲い掛かるも慌てずに避けながら接近する機械の一つに接近する…

瞬間、伏せたと思いきや彼が接近していた機械が別の機械から放たれたレーザーに貫かれる

「伸縮自裁の愛（バンジীগム）」

それを見た新はチャンスとばかりに三度ソウルキャンデイの一つを消費して原作の念能力を再現…

機械の残骸にくっつけて即席の鎖分銅にしてしまう

「せえ、のっ!!」

それを振り回して機械を破壊、付着させてさらに振り回すスピードをあげる新…

振り回していく内に、残り一つとなった機械…

それに向けて振り落とそうとしたが、突然力が抜ける感覚を覚えてしまう…

それを好機とみたのかレーザーなどを放ってくる機械…
だが

「チエックメイト」

力が抜けた瞬間にタイミングを見計らってバンジীগムを解除したことでガラクタが散らばり、それらが機械の攻撃を防いでしまう

そして、新は最後に残ったソウルキャンデイを…

「横向きの竜巻（ブッシュユ・ド・ストーム）」

オーラの奔流として放つ

それによって穿たれる機械…

竜巻が収まる頃には、既に機械はものいわぬガラクタと化し…

「…よし、これでよかった？」

それを見た新はにこりと二人を見て、それを見た二人は啞然としていた…

二十一話：聴取

なのは達を助けた後に、機械軍を破壊した新…

そんな彼は現在、なのは達が活動の拠点としている次元戦艦…

アースラの取調室で、事情聴取を受けていた

「なるほどねえ……」

取り調べを担当していた、アースラの乗組員だと言うエイミィ・リ

ミエツタがそれを聞いて納得したような声を上げる……

「あの……俺ってどういう立場になりますかね？」

少し不安になりながら問い掛ける新…

それを聞いて、エイミィは安心させるように言う

「ああ、それなら大丈夫！…君は次元漂流者…所謂世界間の迷子で
偶々巻き込まれた、ってことになってるから」

つまり、異世界への無断移動や、なのは達の任務に介入と言う形の
戦闘行為は不問となっていると言うことである

「そらと、君が次元転移する原因となった本はこっちで保管するけど
良かったかな？」

そう言いながら、空間ディスプレイで、自身が転移する理由となっ
た本を見せてくるエイミィ

それにたいして新は

「いや、それうちの家にあったものなので俺のじゃないですよ」

—たぶん、母か父のものです

と返す

それを聞いてへ？そうなの？というような顔になったエイミィは
しばらく考えると……

「……じゃあ、ご家族に許可がもらえるまでこちらで預かるって形で
良いかな？……取り敢えず」

それなら大丈夫だと思います

と、苦笑気味に頷く新…

こうして、取り調べが終わった新はそのまま用意された部屋で休む
ことになったのであった…

「新くん！」

「ん？……あ、高町さん」

用意された部屋で、暇を持て余していた新……

そこに思わぬなのが訪れた

見ると、なのは以外にももう一人いた

「……お前がはやての言ってた新か？」

見ると、なのはと一緒に行動していた、赤い服の子だった

「……そうだけど？」

——誰お前？みたいな顔をするように心掛ける新

原作知識で知っていても、初対面なのだ……

その位しておかなければ、不振に思われる可能性がある……

と、新の顔を見てなにかに気付いたのか、自己紹介を始めた

「……ヴィータだ、お前のことははやてから聞いている」

「？八神さんから？」

少し警戒心を解いた顔（の演技）をした新になのはが説明する

「ヴィータちゃん、はやてちゃんの家族なんだよ？」

それを聞いて納得した（演技をする）新……

「その、なのはを助けてくれてありがとう……」

そんな彼に少し恥ずかしげにそう礼を言うヴィータ……

「えっと……どういたしまして……」

思わず疑問系でそう言ってしまう新……

そんな二人を見て「にやはは……」と苦笑しながらも嬉しそうな顔

になるのはであった

「あ、そうだ……新君、今から一緒に来てくれる？」

「？何処に？」

「医療室」

「……へ？」

二十二話：診察

「……本当に治ってるわね……」

「治ってる、な……」

「治ってる、の……」

なのは達に引つ張られるようにして医療室に連れていかれた新は、服を巻くって腹部を医療担当だと言う八神はやての家族……

シヤマルに見せていた

「ヴィータちゃん、本当に怪我してたの？」

「ああ、間違いねえ……血が出ていたのはこの目で見てたし……」

「かすり傷だから平気！って言ってたけど……まさか本当だったなんて」

「だから言ったでしょう？ 平気だった」

「まあ、出血範囲が広いとそう思ってしまう傷もあるからおかしくはないわね？」

捲っていた服を直す新をみてそう言うシヤマル……

「オーラを怪我していた所に込めてしまえば、怪我なんてすぐに治るんですよ」

「念能力者ってのは皆そうなのか？」

新の言葉に思わず呟くヴィータ……

人によって違うが、念能力者の回復力は皆高い方であることは確かである

と、ここでのなのは羨ましそうな目を向けていることに気付く新……

「？ どうかしました？」

「！ううん、なんでもないの……ただ、羨ましいと思って……」
羨ましい？

それを聞いた新は首をかしげ、なのはが話す

「その……そんな力があれば任務とか楽だろうなあ……って」

瞬間、シヤマルとヴィータがなのはを睨む

「お前は休め」

「なのはちゃんは休まなきゃ駄目」

はい……と、圧力に負けるのは……

其れを見た新は、首をかしげる

「? 何かあったんですか?」

新のその問いに、ヴィータはなのはをジト目で見ながら説明する

「こいつ、具合が悪いのに無理して任務に出てたんだよ」

「それで、このままじゃ危険ってことで2、3日ほど入院させることになったのよ」

ヴィータの言葉に補足するようにシャマルが話す……

「……はい!」

それを聞いて目を見開く新……

それに対して、なのははにはやは……と苦笑する

「(入院しなきゃならないレベルだったのかよ!?)」

原作知識でもそこまでいっていることは書かれていなかった為、驚く新……

シャマルは其れを見て丁度よいと思ったのか、新になのはの身体がどうなってるのか説明をしてくれた

「今のなのはちゃんは、”後天性魔力行使器官障害”って言うのになってるの」

「?後天性……ってのは解りますけど……」

—確か、生活習慣病みたいに日々の生活環境で起こる異常のことですよね?メタボリックシンドロームとか

と、確認を行う新……

—メ、メタボ……私の身体が、メタボと同じ……

それを聞いて少しショックを受けたなのはを無視して頷くシャマル……

「そう、なのはちゃんの場合は、魔力行使器官……リンカーコアっていう魔力を作って蓄える器官を酷使しすぎて機能不全に落ち掛けているの」

「……筋肉痛とか骨折みたいな感じ?」

そう思って良いわね

と、シャマルが頷く

「リンカーコアに効く薬品とかは存在しないから、現状有効的なのは休ませることだけなの」

「ああ……だから入院……」

「そう……でも、生活する面では大丈夫だから、魔法の使用を徹底的に抑えさせるけど」

それを聞いたなのはが少しショックを受けた顔になりながら、質問する

「あの……因みにどれくらいの期間を……?」

「そうね……大体5ヶ月位かしら?」

「ええー!?!」

それを聞いてショックを受けた顔になるのは……

「当たり前です! 下手したら魔法が使えなくなるかも知れなかったんですから、これを機に反省しなさい!!」

そう言われたなのは、うう……と涙目になり、それを見た新とヴィータは苦笑するのであった……

二十三話：

「じゃあ、新は無事なんですか？」

「はい、こちらで保護しましたので、ご心配なくと……」

新達が医療室で検査をしている一方で……

リンデイは新から教わった新の家の電話番号に、艦長室から電話をかけていた……

用件は当然、新の件についてである

「解りました。どうして息子が其方にいるのか、貴女方がどのようなことを行っているのか、そういったことは後日聞きます。……今から主人や娘にも伝えますので、失礼します」

「は、はい……!!明日息子さんをお送りする際にご説明致します……!!」

ガチャン!

と、リンデイがそう言ったのを最後に電話を切られる……

「……………」

それにたいして、リンデイは冷や汗を流しながら、通信機を切り、所定の場所に戻す……

「艦長、お茶をお持ちしました……つてどうしたんですか?」

冷や汗を流すリンデイを見て、休憩にとお茶とお茶菓子をもってきた隊員が心配そうな声をかける……

「……………今、新君のご家族に電話したんだけど……」

「あゝ……………」

それを聞いた隊員はそりゃあそうでしょ……と思いつつ持った

きたお茶とお茶菓子をテーブルにおく……

有り難う、と言いなながらお茶に角砂糖を落としていくリンディ……

「……あの怒りようだ、色々苦情を言つてきそうね……」

「？苦情、ですか？」

ええ……、と角砂糖を五つほど落とす後に、ミルクをいれてかき混ぜながら言うリンディ……

……この人、お茶をコーヒーと同じと思つてないだろうか？

「何でそんな危険なことをこどもにやらせるんですか？」、とかかしらね……」

「いや、それが普通ですよ？」

思わずそう返す局員……

というか、その反応が普通なのである

普通、子供にそんな危険な事をさせないものである

「なのはさんの所は、ご理解いただけただけだけど、彼の御家族は難しそうね……」

「……勧誘するつもりで？」

ええ、と言いなながらお茶をすするリンディ……

美味しいのだろうか……？

「本当は隠蔽するつもりだったんだけど、今回の任務は上層部からの指示……だから彼の存在は確認されてる可能性があるもの……」

——そして、彼の特殊性……念能力を知った彼らが何をしようとするかは明白……

なら

「此方が先に勧誘して、私が上司になるという形で保護してしまえば、少なくとも成人するまでは脅かされる可能性はなくなるはず……」

「……解りました、手伝えることがあれば言ってください、出来る限りのフォローはしますので」

「宜しくね、エイミィ……」

力ない笑顔で言うリンディに、局員……

エイミィ・リミアはにこりと笑うのであった……

二十四話：説明

朝……固導家のリビングにて……

「……………」ダラダラ

約束通り、新を家まで連れ帰ったリンディ……

そのまま事情を説明するため、家の上がらせて貰っていた彼女は、冷や汗が止まらなくなっていた……

「……それで？という経緯で息子は怪我をして、あなた方に保護して貰ったのか」

「きちんと説明、してくれませよね……？」

リンディと向かい合う形で座っていた、新のご両親が目が笑ってない笑顔でそう言う……

それに対して、リンディは……

「は、はい……」

頷くしかなかった……

因みに、

「……姉ちゃん、離れてくれない？」

「やだ」

昨日、いきなり居なくなったのがトラウマになったのか、早妃にしがみつかれながらも新は朝ごはんを食べていた

「……念能力に管理局、ねえ……」

「新の件については、今は置いておきますが……子供にそんな危険な作業させるなんて何考えてるんですか？人手が足りないからって限度があるでしょう」

ー子供が働くななんて、どんなに科学が進んだり福利厚生が確りしてても奴隷と変わらないじゃないですか

リンディからの話を聞き、何か考えるような顔になる父親と、其を聞いて不服そうな顔をする母親……

朝ごはんを食べていた新から離れようとしなかった早妃も、盗み聞きのような形で聞いていたからか苦虫を噛み潰したような顔をして

いた

「お気持ち解ります……しかし、魔導師の数はとても少なく、次元世界の平和の維持のためにも」

「いや、志は立派だけども……」

リンデイの言葉に呆れたような声をあげる母……

しかし、それを父親が止める

「その辺にしておけ……話が終わらない」

その言葉に不服そうながらも静かになる母……

「確かに、子供に魔法なんて兵器と変わらないものを使わせて、危険な事をさせるのは大問題だが、今は話すことではないだろう……?」

―問題は、

そう言いながらリンデイに目を向ける父親……

「今の新しい立ち位置だ……」

その言葉を聞いて、目を見開くリンデイと頭に?を浮かべる母と早妃……

リンデイから話を聞いていた新は「やっぱりその話になっちゃうか……」という顔になる

「……あの、どういうこと?」

我慢できずに問い掛ける早妃に答えたのは、リンデイだ

「……魔力を必要としない念能力の存在が確認されたため、管理局に目をつけられる可能性があります……」

「管理局って魔法によって秩序を守っている組織だから、魔法以外の戦う手段があることを認めたくないのが偉い人達にいるんだってさ……逆に、人手不足の現状を打開できるかもしれないってことで俺をスカウトしようとする派閥もいる、と」

「……新、あんたそれ狙われるんじゃないの?」

新の説明を聞いて、母親が青くなりながらそう言う……

因みに、この狙われるというのはスカウトか暗殺という意味である
「可能性はあります」

「……あんたなんでそんな能力使えるの?今までそう言うの使えなかったんじゃないの?」

リンデイの一言を聞いて、絶望したような顔でため息をする母……それを背中で指すつてあげる父親をチラリと見た早妃は、新にそう問い掛ける

リンデイたちに見つかる前から使えるなら、自分たちが気付かないのはおかしい……

そう思った早妃は、新にそう問い掛ける

シヨツクのあまり黙ってしまった母に代わる形での義理の姉からの問いに、新は前々から用意していたカバーストーリーを話すことに決めた……

「……まあ、話しても良いか……」

―言ってもバレねえだろうし……

と、わざと辛うじて聞き取れるレベルで呟く新……

そして、そんな新の呟きにピクリと反応したリンデイをこつそりと広げていた”円”で確認した新……

「……俺が入院していたの、覚えてるよね？」

そのまま彼は、自分の家族たちに確認する

それを聞いた家族皆は、何か関係があるのか？と思いつつながら頷く

「入院していた時にさ、ある夢を見たんだよね」

「……夢？」

訝しげに呟く父に「うん、夢……」と言うとそのまま続ける新

「その夢で会ったお爺さんがさ、俺を弟子にしてくれたんだ」

「脈絡無さすぎない？なんであんな弟子になつてんのよ？」

復活した母からの容赦ない問いに苦笑しながら説明する新

「なんでもその人、ずっと一人で念能力の修行をしていた人らしくてさ……死ぬ間際に”弟子をとりたいた”って強く願ったらしくて、何処かの世界の人に夢という形で念能力を教えるって言う発を作っちゃったんだってさ……」

「……？発つてその人の必殺技だよね？ずっと修行していたなら、もう作っていたんじゃない？」

「人によっては系統の違う発を複数持つことは出来るんだよ……因みに、弟子入りして修行しないと目が覚めないようにもしていたらし

い」

「強制?!まさかの強制?!」

念能力について聞いていた早紀が疑問を口にし、それにたいしてそう答える新

それを聞いたリンディが突っ込みをいれる

先程まで新が念能力を身につけた経緯を知るために話をひっそりと録音していた彼女だが、流石に強制だったとは思わなかったらしい……

確かに強制とは誰も思わなからう……

そして、新はカバーストリーを録音させたことで偽の証拠として管理局側に持たせて、他にも存在するであろう転生者の目を欺かせるようにする手札を作らせた……

閑話休題

「因みに、人格的に問題がある人だったら性根を叩き直す為、っていうのも含まれていたそうです」

「それでもダメだったらどうするつもりだったんだ……?」

「……それは聞いてない、なんか怖かったし……」

『賢明だ(ね)』

父の呟きにそう答える新……

それを聞いた全員が口を揃えてそう言うのであった……

「……でも、入院から少し変わったのは納得したかな?」

突然の早紀の言葉に頭に?を浮かべる皆……

「ほら、セラちゃんと距離置くことにしたじゃん」

ああ……と、納得した顔をする両親……

確かに、今までの新なら元幼なじみのセラから逃げられなかった、というより反抗なんてしなかっただろう……

そんな家族間の空気をリンディはこほん、と咳一つ出して霧散させる

「其ですすね?……もしよろしければ、お子さんを守るためにも、管理局に入ってみるといのはどうでしょうか……?」

そう、本題を投げつけるリンディ……

「……直球でスカウトするんだな」
それを聞いた父が、そう呟くのは無理もなかった……

二十五話：会議・一

「以上が第97管理外世界の念能力者……固導新に関する情報です」

新の実家、固導家での話し合いが終わった日の夜……

リンディは時空管理局の本部の要請で緊急会議を行っていた……

議題は勿論、新に関してだった……

昨日念能力の存在が明らかになったばかりで会議が開かれる、というのは極めて異例だがその異例が認められるほど重要であると言う意味でもある……

「リンディ提督。彼、固導新の話では何人か同じ存在……念能力者、ですかな？その存在がいるように思えるが」

「はい……彼が念能力を手にした経緯によると、”誰でも手にする事が出来る”という特性上、何人もいるそうです……しかし、彼の行動範囲内で自分と同じ念能力者は見つけてないとのところです」

何らかの念能力者組織があれば何らかの接触を考えるが、新の念能力は実際は転生した際の特典で身に付けたもの……

そんな存在はないし、無い存在と接触を図るなんて無理な話であるしかし、管理局上層部からすれば少しでも念能力とそれらを使う者たちを把握し、技術を知りたいというのが本音である

引き入れるにしろ、処分するにしろ、だ

「だが彼は本当にその世界の出身者か？もしかすれば管理局の存在を知っており管理外世界に逃げただけかもしれない」

「その可能性は低いと思われます」

上層部の一人が発したその言葉に、リンディは即答した

「彼のご家族も調査しましたが、ご家族全員がその世界出身であることは調べがついてますし、次元世界や管理局、魔導師に関する知識も持っていないかったこと。そして、彼のもつ力自体が今まで見つかった事のない技術です……類似するようなものもありませんでした」

―でも、早妃さんに関して是一年より先の情報がないのよね……

？

答えながらも、そんなことを思い出すリンディ……

一年前に、ボロボロで倒れていたところを新が見つけて保護したのだが記憶喪失になっており、固導家の人間に懐いている、ということ
で養子にした、という事情を新の父から聞いたのだが、その拾われる
前の痕跡がなかったのである……

まるで、突然現れたようだった……

何でかしらね……？

「その世界の国の上層部はそれを把握していないのか？」

リンディがそう思っていると、上層部の一人が問いかける

一度考えるのをやめたリンディはその問いに答えた

「はい、彼に念能力を教えた人物曰く第97管理外世界において歴史
的な観点から見てもはや魔法等の存在はゲームや本、空想の存在で
しか知られておりません。」

ですが過去にはその存在が公にあつた可能性もあるとのことですが

そうやってモニターに表示された新たな資料は、第97管理外世界
の過去の資料だった

「過去には何らかの形で存在したようですが科学技術の向上に伴い消
えていった存在と考えるべきだと思います」

第97管理外世界

文化レベルBで魔法技術もない世界なのだが、なぜか過去の資料等
を調べれば魔法だけでなく、俗に言う超常と呼ばれるに値する事柄に
関するモノが出てくる……

魔術、錬金術、呪術を始めとする魔法技術……

それらを記した魔導書、人の生き血をすすする妖刀、オーパーツ……
それらを扱う魔術師や仙人の存在……

さらに過去の歴史上の出来事には陰陽師と呼ばれる存在が政治に
関わっていた時代もあれば、魔女狩りなんてものまで行われていた記
録が存在する……

そう、存在しないといわれていた筈の魔術……超常に関する資料が
多いのだ

曰く、念能力を扱う念能力者は、地域などによって呼び名が変わり、
その中に魔術師も含まれているのだそうだ……

つまり、それらの呼び名で呼ばれていた人々の正体は念能力者で、さらにその一部になのはやはやてのような本当の魔力持ち……リンカーコアを持つ人がいたのではないか？

という見解が生まれたほどである……

だけど今回の事に関してはそれこそが重要になる

第97管理外世界は独自の技術、又はそれに類する技術を持っているが科学の進歩と共に衰退し歴史から消えた……

つまりをはじめとする今現在残っている魔術師たちは、衰退した技術を代々受け継いできた最後の生き残りから受け継いだ、いわば最後の念能力者という推測が成り立ち説得が出来るのである……

そう、念能力者の存在に関する推測はたてる事が出来る

だけどそれが真実かどうかは解らないため、捕捉としておいている状態である

「ふむ……念能力者の存在については我々の専門外のうえに資料不足となると推測するしかないのだ、今のところは我々の知らない技術が管理外世界にあるという真実で十分ではないか？追々分からないことがあれば調査、又は取り調べすれば良いし、今のところはレアスキル扱いで良いだろう？」

魔法とは違う技術のため、専門外であるということと念能力の存在はとりあえずレアスキルとして認知すれば良い、という上層部の一人の言葉に他の皆が賛同の空気を出す……

「そうですね。だが、リンディ提督……その念能力者、固導新が我々時空管理局に対し技術提供をする気がないというのは本当かね？」

「はい。真実です」

が、リンディの返事に会議室がざわめいてしまった

新の意見としては、「魔法技術を中心に栄えた管理局に……というよりミッドチルダに広まってしまったら今迄築いた文化等に悪影響……

最悪戦争の引き金になってしまうのではないか？」という懸念から、いまはまだ提供するつもりはないということになったのだ

只し、そちらで解析は勝手にしてもよい、ということになっているこれにはリンディも賛同し、その旨をこの会議で配っている資料にも載せてあるし、話してもいるのだが、やはりその意見は大きく二つに別れていた

一つは管理外で魔法技術とは違うが下手すれば同類の力を持つ技術を有しているのだから管理局に従うべきだと声を荒げるという者

もう一つは表向きには魔法が存在しない管理外世界の技術で、なおかつ魔法ではないのだし当の本人が拒否してるのだから仕方がないという者

そして、ごく少数ではあるが意見を発さず黙っている者もいるが、意見を発している人数としてはお互いの数はほぼ同じ……

そして、その意見を出しあっている人物たちの立場が見事に別れて

いた……

「(やっぱり、地上側は新しく人を欲しがってる一方で本局側はいれたくないみたいね……?)」

万年人手不足、その中でも優秀な人材を取られる為にさらに深刻な人手不足に陥ってしまったている地上本部は、魔法やレアスキルとは違って誰でも身に付けられるという特徴のある念能力を取り入れたいという意見がおおい……

その一方で、魔法技術でのしあがってきた本局側は念能力の介入により立場が危うくなるのを恐れているのか入れたくないという意見を出している……

—これ、下手したら新君地上側からスカウトが、来るかもしれないわね……

会議が終わり、部屋に戻ったリンディはそう思いながら自身の作った新に関する資料に目を向いて読み直す……

その書類上の最後に、『管理局に関わる意思について』というページしかない資料があるのだが、そこには

『習得方法が容易のため、むやみやたらに念能力が増えるのを防ぐため極力関わるつもりはない』

という一文のみがある

これのお陰かどうか解らないが、管理局に取り入れることに反対の派閥……で良いのだろうか？

それらは新にたいして何かしよう、という動きは今のところ無さそうである

ただ、問題は……

「レジアス・ゲイズを初めとした地上本部側……なのよねえ……」

意外というべきなのか、やはりというべきなのか、地上本部側がとても積極的だった……

なにせ会議が終わったあと、部下を通してだが本人と是非話をさせて欲しい、と言ったほどなのだから

だけで積極的になる気持ちもわかる

「人手不足の解決になるかもしれないものね……」

誰にでもできて、魔法と互角になるかもしれないものの存在が見つかったのだ

欲しいと思うのは当然である

—とりあえず、しばらくは何もなければ良いのだけれど……

リンディは少し不安になりながらも手が届くところに置いておいたお茶とお茶菓手に手を伸ばすのであった……

二十五話：裏：会議・一

「……………新？」

「何…う…つていうかどうしたの？」

リンデイが本局で開かれた会議に参加している一方で……

新から念能力の説明を受けていた固導家の面々……というより母は新の肩に手をおいて目をキラキラさせていた……

因みに、台所で、である

「たまに……いや、土日祝日暇なときで良いから、掃除とか手伝ってくれない？……お駄賃あげるから」

「？まあ、俺の発使えば三十分ぐらいで終われるから、別に良いけど……」

それを聞いて、ガツポーズする母と、それを見て少し引く新……そんな二人を見ながら、父と義姉はテーブルにおかれた物に触れて感心していた

「……まあ、お母さんのその反応は解るね……？」

「ああ、こんなことが出来るなら、おカネを払ってでも頼むわな」

そう言いながら、置かれていた先程まで油などで汚れていた箸の食器類に指を走らせる……

—キュツキュツ♪？

……油で汚れていた箸の食器は指と擦れてそんな音を出す……

感心しきる二人のそばにある”黒い”カボチャのランタンが自慢げに笑っているように見える……

「確か、”カボチャの創り手（ジャックオランタン）”……だっけ？」

「うん、魂の提灯（カボチャノランタン）とは別の、最近新しく作ったものだよ」

落ち着いた母と共にリビングに戻りながら説明する新……

—もうメモリは頭打ちだけど、問題ないしね

そう言いながら椅子に座る

「？メモリ？」

それを聞いて？を浮かべる早妃

「念能力者って、作れる能力の数が人それぞれ違うんだよ」

—俺の場合は4つね、と説明する

家族に話す分なら問題ない

そう考えた新はそう言った

「?4つってことは他にもあるの?」

うん、と母の問いに頷く新

そして、自分の発について説明を始める

「鍛練用の死者と生者の殺しあい（ハロウィン・パーティー）、オーラ保存の魂の提灯（カボチャノランタン）、作製のカボチャの創り手（ジャックオランタン）、そして隠蔽用のカボチャ隠しの黒い影（バムブラック）」

「……どんなものなんだ?」

「死者と生者の殺しあい（ハロウィン・パーティー）は……」

父の問いに素直に答える新……

死者と生者の殺しあい（ハロウィン・パーティー）の説明が終わった瞬間、家族全員が我慢できないとばかりに立ち上がり、新をしっかりとつける

「お前毎晩そんなことしてたのか!」

「それってつまり自分でモンスター創って殺し合う、ってことよね!」

下手したら死ぬかもしれないことするんじゃないの!!」

「あんた自殺志願でもあるの!」

「い、いや……毎日じゃなくて、週に数回……」

—変わらない（んねえ）よ!!

新の反論に対してそう返す家族……

そして、新を暫く説教した上で、死者と生者の殺しあい（ハロウィン・パーティー）は原則使用禁止……

どうしても使いたいなら、リンディを始めとした管理局員か家族が許可したときのみ使用してもよい……

ということになった……

—実質管理局側しか許可とれないじゃん、てかその許可もとるわけにはいかないじゃん……!!

それを聞いた新は内心そう叫ぶ

家族がそんな危険なことを許可する筈無いし、管理局には念能力の調査は認めているが出来れば本局からの介入は避けたいので、リンデイ達に頼むと本局に話がいきそうなので無理……

詰んだ……

そう結論して落ち込む新……

「で、他は？」

「ん？……ああ、魂の提灯（カボチャノランタン）は……」

父が改めて問い、それに対して答える新……

「魂の提灯（カボチャノランタン）は、いわゆる”オーラの貯金箱”なんだよ」

「貯金箱？」

母の言葉に頷きながら話す

「俺のオーラって周りのオーラを引き寄せる性質で、その引き寄せたオーラを魂の提灯（カボチャノランタン）に入れて保管するんだ」

オーラとは、生命力のことである……

全ての生き物はそれを線香の煙のように垂れ流しにしており、新のオーラはそれらを引き寄せる性質がある……

それを水見式で知った新その性質を利用してオーラの貯金箱のような性質を作ったのである

「で、その溜め込んだオーラで攻撃や防御、補助に回復といった効果を持つ能力を使い捨てで開発、使用できるようにしたんだ」

—そして、その使い捨てのオーラを手取り早く補填するために死者と生者の殺しあい（ハロウィン・パーティー）を作った、って訳
そう話した新は、家族を見ると呆れた顔をしていた

「？何か？」

「……いや、だからって殺しあいする能力を作るなよ……」

「ほっとけば溜まるんなら、大人しくしてなさいよ……」

「害虫駆除とかしてたのってオーラがほしくてやってたの……？？」

もう、呆れ疲れたような顔になる家族に苦笑するしかない新……

「……で、他は？」

「えつと、隠蔽用のカボチャ隠しの黒い影（バームブラック）……これは、魂の提灯（カボチャノランタン）の問題点を解決するために作ったんだ」

「？問題点？」

「オーラを保存している間、解除することが出来ない……というより解除した瞬間、集めたオーラが霧散する」

”隠”と呼ばれる技術で隠しても良いのだが、それだと神経を使うため疲労が溜まる

そのため、有事以外は影に保存するという方法をとったのだそう
「出し入れするのにある程度の大きさが必要だけど、結構重宝しているよ」

—魂の提灯（カボチャノランタン）の応用である半永久的保存用の魂の蠟燭（ソウルキャンディ）も保存対象だしね

そう言いながら、魂の提灯（カボチャノランタン）から作ったカボチャのランタン型の蠟燭を自身の影にポイポイと入れる……

それを興味深く見る母と早妃……

「荷物運びとか楽そうね？」

「俺の発限定だから、これから言うカボチャの創り手（ジャックオランタン）を介さないと入れらんないぞ？」

母の言葉にそう返す

「カボチャの創り手（ジャックオランタン）はさつき見せてもらったな？」

「うん、入れたモノを材料にして、あらゆるモノを作り出す能力」

そう言いながら、新は冷蔵庫からカルピスの原液を取り出して、コップに注ぎ、水を入れてカルピスを作りながらからのコップを取り出す

そして、それらをカボチャの創り手（ジャックオランタン）に入れる

「その応用で、仕分け……みたいなことも出来る」

その言葉と共に、カボチャの創り手（ジャックオランタン）から水の入ったコップと、カルピスの原液が入ったコップが出てきて、それ

を新はキャッチする

「さっきの汚れた食器も、そうやってきれいにしたと……」

「そ、汚れと食器を分けて食器だけ出して、その汚れは更に水と油に分けて水はシンクに捨てて、油は古い新聞紙を追加投入して油を吸った紙屑としてゴミ箱に捨てた」

「便利すぎる……!!」

「入れたままにしておけば、重いものを持ち運ぶのも楽ね……」

「出し入れする時、見られないようにする必要があるけどね」

「……」

感心しきる姉と母の一方で、父はなにかを考える

「?どうしたの、父さん?」

「……新、ちよつと試してほしい事があるんだが、良いか?」

「?」

父の問いに、新はキョトンとした顔になるのであった……

二十五話：裏：会議・二

「……ヤバイな」

「ヤバイね」

「ヤバイわね」

「……そんなにヤバイ？」

数分後……

リビングのテーブルの上に置かれたモノを見て呟く家族と、それに疑問を浮かべる新……

その問いにたいして、父はテーブルに置かれていた宝石を手にしながら、言い返す

「寧ろ、なんの変哲もない割りばしとか新聞紙、バーベキュー用の炭なんかでダイヤモンドを作れることがヤバくない事だと思うか？」

その言葉に同感とばかりに頷く母と義姉の女性陣……

確かに、ダイヤモンドは炭素で構成された宝石である……

理論上は木炭、というより燃えるものならダイヤモンドは作ることが出来る……

理論上は、だ

実際は超高温、圧力……様々な要因を持って作られる筈なのだ
間違っても一般人が簡単に作れるものではない……

それを材料を放り込むだけで作り出せるということは、新はイメージが出来て、材料があれば何でも作れるということである

それも、直径約30センチほどの巨大ダイヤモンドを、である
ちやつかりブリリアントカットの形にしているのがムカつく……

「……これ、新が凄いのか？それとも念能力が凄いのか？」

「……どっちもじゃないかな？」

父の言葉にそう言う母……

もう、深く考えたくないようだ

「これ、下手したら犯罪者に狙われるよね……？」

顔を引くつかせながら言う義姉……

「……その気になれば、粗大ゴミの中にある家電から金のみ出して延

べ棒みたくして吐き出せると思う……」

「……………」

新の言葉に固まる三人……

そして

「……よし、今日はもう寝ようか」

「賛成」

「そうだね」

そう言っただけ席を立つ固導家の面々……

この時、家族全員同じことを考えていた……

「もう、考えたくないです！」

そりゃあ、魔法に管理局、念能力とファンタジー要素が一気に来たらそうなるだろう……

おまけに、新の能力が、リサイクル、端的に言えば資源チート……異世界だけでなく、全世界から狙われる可能性があるのだから尚更だとりあえず、どうするかは明日決めることにした

お疲れ様でした……

「新、ダイヤモンドとか延べ棒とかは極力作るな」

翌日……

朝食時に父からそう言われた新は「まあ、そうだよな」と呟く

「分別とかはOK？鉄屑とか、家のごみとか」

「それはやっても良い……なんなら鉄屑とかアルミとかは俺が製鉄所で売って、そのお金をお小遣いとして渡しても良い」

「解った……今度時間が出来たら不法投棄されてるゴミとか拾ってくる」

「あるの、そんなの？」

「海のなかに捨てられた自転車とか、道端の空き缶とか……結構あるよ……」

「小銭とかは自分で持っておきなさい」

姉の言葉にそう返しながら父の言葉に解った、と呟く新
そこで、母が徐に昨日作ったダイヤモンドを持ってくる

「……で、これどうするの？」

「……忘れていたかった……!!」

それに対して頭を抱える父……

「……売る？」

「どこで手に入れたか説明するの、難しくない……？」

「新、これ小さく作り直せない？」

「作り直せるけど、勿体無くない？」

「……いや、こんな大きさのものは売れないだろう……」

「そう？……それなら小さくしておくよ」

新が作ったダイヤモンドをどうするかに議論がシフトしていく

……

「……姉さん、持っていく？嫁入り道具として」

「持つてくわけじゃないでしょ!!阿保か!!」

ーしかも結婚する予定もないよ!？」

と、新の提案を拒否する姉……

「……一応、査定だけしてもらってどうするかは後で考えるか……？」

「じゃあ、細かくするよ？……一カラットぐらいで良い？」

「もつと小さくても良い……0.5カラット前後だ」

りようかい、と父の言葉に従って一度カボチャの創り手（ジャックオランタン）にダイヤをいれて小さなダイヤを作り出していく……

数分もたたずに、小さなダイヤがこんもりと山のように積もった

「……新、あんた将来廃品回収業者やってみたら？」

「念能力見せびらかすことになるから、それはやだ……お小遣い稼ぎと自衛意外に使うつもりもないし」

「……まあ、まだ小学校卒業もしてないんだ、ゆっくり決めなさい

……」

「おーい、そろそろ行かなきゃ遅刻するわよ？」

母の言葉に時計をみる……

確かにもういい時間である

「ホントだ……じゃあ、行ってきます」

「行ってらっしゃい」

弁当を受けとりながら、その言葉を聞き、新は学校に向かうのだっ
た……

二十六話：誘

「新くん、ミッドチルダ観光したくない？」

昼休み：

何時ものようになのは達とお昼を食べていた新に、なのはがそう声をかける

「…はい？」

突然の言葉に頭に？を浮かべる新：

それを見たフェイトとはやてが、苦笑を浮かべながら説明する

「この間、義母さんが本部に新の事を話したんだけど、上層部の一部が信用出来ないってごねてるみたいなの…」

「んで、”自分たちの眼で確かめるから連れてこい！”って騒いだらしんよ」

フェイトとはやての説明を聞いて、納得した新：

先日、リンディから上層部には魔力至上主義者が多いと聞いていたので、別段おかしくはない…

可笑しくはないのだが…

「俺、極力関わるつもりはないって話したはずなんだけど？」

解析したいなら勝手にやれば？とは言ったのを覚えていることも含めて話す

それを聞いて、はやてとフェイトも困り気味で話す

「そうなんやけど…」

「こちらに来る際と、滞在する間の費用は向こうが全部持ってくれるみたいだよ…解析をするためにも、新のこと呼びたいってのもあるみたい」

「マジか」

それを聞いて、安直ながらも行こうかな？と考えてしまう新…

スマホのカレンダーを見ながら、話を進める

「行くかどうかは別として、もし行くとしたらいつ行く予定になるかな…?」

「そう言えば、ゴールデンウィークも近いわね?」

「あ! 私達、ゴールデンウィークに行く予定だからそれに合わせようよ?」

「へ?二人も行くの?」

アリサとすずかの言葉にキョトンとする新

それを見たなのは達が頷く

「ミッドチルダに観光してみたいって言うから、誘ったの」

「管理局も見学する予定なんだ」

「本来は一般人は見学出来ないんやけど、二人は外部協力者やから、特別に見学出来るんや」

へえ…と声を上げる新…

「それじゃあ、ゴールデンウィークに行く…ってことでええかな?」

「いや、行くかどうかは別、って言ったんだけど!」

はやての言葉にそう返す新

「で、でもほら…ね?ミッドチルダ、というか異世界に行くなんて中々無いんだし、貴重な体験になると思うな?」

—だからさ、ね?行ってみない?と、不安げに誘うフェイト…

う…と、それを見て言葉に詰まる新

フェイトのような可愛い女の子が、そう言いながら不安そうな眼で見つめてくるのだ…

少し心に来るものがある

「なあ、新くん…少し考えを変えてみたらどうや?」

そんなことを思っていると、はやてが突然そんなことを言う

「?…どういう…?」

新の問いに対して、はやてはたたまかけるように話す

「あんまり断り続けていると、周りから要らない恨みを持たれる可能性もあるし、下手したら犯罪組織に狙われてしまったりしたら、”護る代わりに協力しろ” って言われる可能性もあるかも知れへんで?」

—まあ、これはリンディさんが言ってた言葉やけどな

そう言ったはやての言葉に「一理あるな…」と思う新…

父からも”常に最悪を考えて動け”と言われてもいるので、その可能性も考慮すべきだろう…

それに、うまく行けば自身に魔力があるかも調べて貰えるかもしれない…

そこまで考えた新は

「…解りました、ゴールデンウィークの時に観光旅行するということ
で」

ミッドチルダに旅行する旨を伝えるのであった…

二十七話：拒絶

「ちよつと新!!」

ゴールデンウィークの予定として、ミッドチルダに行くことを決めた新：

彼は、放課後すぐに家に帰って母にゴールデンウィークの予定はあるか聞きに急いで帰ろうとしていた…

そんな彼に、突然話しかける少女…

「…何？成宮」

話しかけて来たのは、”元”幼なじみの成宮セラだった…

今まで、前世の記憶がなかったとはいえ入院するまで追い詰めておきながら謝りもしなかった奴が、高圧的な態度で話しかけて来たことに呆れと共に怒りが生まれた新は、少しなげやりな態度で言葉を返した

「…っ！…何よ、その態度!!偉そうに…!!」

今まで自分に対する態度とは違うことに驚いたセラは、その感情を隠すかのように声を張り上げて大股で近寄る

そんな彼女の顔を、新はむんずと掴んで軽く握る…

俗に言う梅干し…もしくはアイアンクローと言った方が解りやすいか？

「!?痛い痛い痛い!?放しなさいよ!」

「?痛みはない筈だけど?」

喚くセラに新は呆れながら解放してそのまま鞆を背負い、「用がないなら失礼するよ?」と言いながら去ろうとする

「だから待ちなさいってば!!」

それに対してセラが回り込んで足止めする

そんな彼女に、ため息をつきながら対応することにする新

「…で?何?…下らない理由なら帰るからな?」

—どうせ下らない理由だろ?—

と、冷たく言い放つとセラは、

「あんた何で謝りに来ないのよ!!」

そう言った

「……………は？」

あまりの言葉に目が点になる新…

そんな彼に更に言葉を放つ

「何よ？今までこっちは大変な思いしたんだから、とつとと謝りないよ!!」

そう言うと、こんどは今まで何があったか話し出す

曰く、新が入院した原因を知った新の両親が訪ねてきて事情を説明し、それを聞いた家族に怒られた

曰く、自分と話さなくなつてすぐに学校でも可愛いと有名な一つ上の女子達と仲良くなつてるせいで「新は本当は凄い奴なんじゃないか？」と、話題になっている

曰く、そんな彼に距離をおかれているセラは、実はヤバイ奴なのではないか？と話題になってしまい、自分まで距離をおかれてしまっている
というこらししい…

「いや、全部自分の自業自得じゃん？おまけに最後は当たってるし」

―何処に俺が謝る要素あんの？

思わず突つ込みを入れてしまう新…

しかし、その言葉は、彼女にとって火に油処かガソリンだった

「はあっ!?なにそれ私が悪いって言うの!？」

「うん」

迷い無くそう答える新

それを認識したセラは更に言おうとするが

「だって下手したら死んでたんだから、お前が悪いのは当然だろ？」

それを聞いて固まるセラ…

興味本位で教室にいたクラスメート達もその言葉に固まっていた

「…へ？…ちよっ…!?なに言ってる…」

「俺が入院した原因って”急性胃潰瘍”って言ってな？…簡単に言えば強いストレスで胃に穴が空いたものなんだよ？」

因みに、新撰組の斉藤一や、作家の夏目漱石も胃潰瘍が原因で死ん

だのだそうだ

「医学が進歩した現代でも死ぬこともあるものに俺はかかっていたの、解る？ どういうことか？」

— お前、間接的に人を殺しかけたんだよ？

「ち、違…私…そんな…」

それを聞いてパニックだったのか、しどろもどろになるセラ…

人殺し、というのを聞いて一気に自分のやらかしたことに對して罪悪感が生まれたのだらうか…？

— そうだったら良いんだが…

— そう思いながらも新は続ける

「そんな、殺しかけた奴に何で俺が謝らなくちや行けない？ 話しかけなきゃならない？ …… そもそも何で友達を続けにきやいけない？」

— 正論である…

— ショックを受けたセラは、更にその言葉にうちひしがられる…

— だから、お前とは幼なじみ以前に關係をたつたんだよ、ご近所付き合いもあるから、お前との關係だけをたつけど、俺に關わらないでね？ 解った？

— そこまで一息で言い切つて、固まつてしまったセラを素通りして教室を出る新…

— それに對して、瞳から光が消えたセラは、何も出来なかつた…

「…少し大人げなかつたかな…」

— 教室を出て、廊下を歩きながら新はそんなことを呟く…

— 言いたいことを全部言つてスッキリしたことはスッキリしたのだが、少し言いすぎた気がしないでもない…

— 明日あたり、クラスの女子に御願ひしてケアさせるか…

— そう思つた新は、適任がいたかクラスの女子を、思い出そうとして行くのであつた…

二十八話：団欒・二

突然だが、新の義理の姉こと” 固導早妃（13）”には記憶がない
…

正確には、新に拾われるよりまえの記憶がない…

一時期施設に預けられていたが、新や彼の両親が親身になって勉強や常識を教えてくれたおかげで何とか年齢通りの学力と常識を身に付けている…

が、何故か食事のマナーや目上に対する話し方、つとといった一部の知識は固導家の中では一番詳しくあったりするが、それでも一般常識の範囲内だろう…

だが…

「……」ジイイイツ

「……義姉ちゃん、なにしてんの？」

時々突拍子もないことをやろうとすることがある…

帰り道の途中の橋の上で、なにかをじっと見ていた早妃を帰宅中に見つけた新は話しかける…

「あ、新」

「鷺（さぎ）を見てんだ

「鷺を？」

早妃の言葉に、つられて視線を向ける新

見ると確かに、鶴のような見た目の鳥が二匹、なにかをパクパクと食べていた

「ちよつと前に、川が綺麗になったのをアピールするために鯉を放流したんだけど…」

「食われてるね」

「うん、今ので全滅した」

最後の一匹であろう鯉を鷺が食べたのを見て、飽きたのか歩き出す
早妃…

そんな彼女を追いかけるかたちで歩く新

「で？義姉ちゃんは何でこっちにきてんの？…帰り道逆じゃない？」

歩きながら問い掛ける新

早妃は、記憶喪失によつて学力に不安があるため、通信教育にして貰つてゐるのだが、二、三週間に一度電車で学校に課題の受け渡しに行かなくてはならないのである

今日がその日なのは知つてゐるが、駅から家までの帰り道とは真逆の方向にいたのである

「まさかサボリ？」

瞬時にそう思った新は早妃の事をジト目で見つめる

それに気づいた早妃が、苦笑しながら説明する

「sign(この世界で言うLINEのポジション)でお母さんから醤油と胡麻油買ってきてつて頼まれたのよ…」

折角だし、新のことも迎えに来たのよ」

「なんだ、そういうこと…：てつきりサボつたのかと」

「サボれないからね？・レッスンもあつたし」

「？(ダンスでも習つてんのか?)」

そんなこと言いながらスーパーに到着する二人…

「えつと、メーカーつてどこの使つてゐるっけ？」

「醤油は…」

いつも使つてゐるメーカーの醤油と胡麻油を籠に入れていく新

「お菓子買つても良い？」

「会計別だからね」

さりげなくお菓子を籠にいれようとする早妃を牽制する新であつた

「新、緊急事態です」

「へ？…：どしたの急に…？」

買い物を終えて、家に帰つた新と早妃にたいして「おかえり」と言いながら出迎えた母、エレナ…

「とりあえず、上がつて…：着替えたら降りてきて…：ダイヤモンドの査定が出たみたいだから」

それを言われた新は納得して着替えるために部屋に向かう

「あ、母さん…私が変わりに作る？…なに作る予定だった？」

なにか察知した早妃がそう言いながら台所へ向かう

因みに、今夜は肉じゃがだそうだよ…

「あ、そだよ…お母さん、例の件なんだけどゴールデンウィークの最終日に決まったよ」

「あら？…そうなの？楽しみにしてるわね？」

早妃の言葉に、エレナは少し固くなってた表情を柔らかくするのであった…

「…百万…」

「ええ、小粒のものが中心で、カットも少し荒いせいで価値がそのくらい…それでも量もあるし、加工し直せる大きさだから、価値としてはこのぐらい…だそうよ？鑑定書がないのも理由みたい」

「それでも百万なの？」

「鑑定書がなくても大丈夫なのよ」

「へえ…」

「で、新…この百万円、どうする？」

「あなたで作ったモノを売ったんだから、これはあなたのモノよ？」

そう言っつて新の前に百万円の札束を置くエレナ…

因みに、父は一度この札束をおきに帰った後に残りの仕事を片しにまた仕事場へと向かった

「うくん…貯金しておく…つてのも考えたけど、ミッドチルダの旅費になりそうだしなあ…」

「？ミッドチルダ？」

新の呟きに？を浮かべる母…

それを見た新が、そう言えば言っつてなかった…と、なのは達からの話を持ちかける

「つまり、新の念能力を説明するために旅行に行きたいと」

「うん、良いかな？」

「そうね…別にゴールデンウィークは予定ないし、大丈夫だと思うわよ…」

「早妃、ゴールデンウィークあんた予定ある？どこかに行きたいとか

肉じゃがを煮込んでいた早妃に母は問い掛けると、「アレ以外の予定はないよ？」と、返す早妃

「私達は予定はないから、お父さんに聞いてOK貰ったら良いわよ？」
「わかった」

母からそう言われた、頷くのであった

番外：登場人物

（主人公）

名前：固導 新（イメージCV：櫻井孝宏）

年齢：10

所属：私立聖祥大附属小学校・4年生

技能：念能力、魔法（未定）

容姿：少しはねた黒髪と、真っ直ぐな瞳を持つ

概要：

とある理由で”魔法少女リリカルなのは”の世界に転生した転生者で主人公

世界の管理をしている神ディオニウソスの業務ミスで10歳になるまで前世の記憶が戻らず、幼なじみに入院するまで苛められていたが、そのさいの走馬灯で記憶が戻り、幼なじみとの縁を捨てて特典である念能力を扱う才能を手に入れた

小さい頃に原作の主人公、”高町なのは”と交流があったらしく、彼女からは一っだけながらも年下であることもあって可愛がられている（新自身としては喜んでいいのかわからない模様）

好きな食べ物は魚介類とクリームやあんこ、カボチャといったねっとりとした甘いもの

ホイップクリームは絞り袋から直に吸えるが練乳は吸えないタイプ

念能力：能力の効果は”収集と作製”、イメージは”ハロウィンとお菓子”

水見式は”結露する”という特質系のオーラで”周りから水分を集めてコップの水を増やした”と解釈したことと、新自身がコレクター資質を持つことから効果を決めた

イメージは、現世の誕生日が10/31のハロウィンのため

発：前述の通り、ハロウィンをテーマにしたもの

”魂の提灯（カボチャノランタン）”

自身の周囲（約五メートル以内）をふよふよと浮かぶ直径約37.

1cmで高さ18.5cmの南瓜のランタン型の発

下手のところを取っ手と鎖が少しあるがあまり使う機会がないもよう

効果は”新が仕留めた生き物の持っていたオーラを回収、保存”するというもので、得たオーラを更に後述の”魂の蠟燭(ソウルキャンディ)”に加工する

得られるオーラの量は、意識が強い生き物であるほど増える
つまり、

人間 \geq (念獣) \geq 鳥獣 \langle 魚類 \rangle 虫類 \langle 植物の順でオーラ量は変化する

”死者と生者の殺しあい(ハロウィン・パーティー)”

魂の提灯(カボチャランタン)のオーラ回収の効率向上のために作られた鍛練兼浄化用の発

いわば”円”のなかにあるその土地に染み付いた怨念を一ヶ所に集めて異形の怪物を生み出し、それを倒すことで”生き物を殺した”と認識、形作っていたオーラを全て回収することができるようにした
しかし、戦いが長引く程氷が溶けて水になるように得られるオーラ量が少なくなっていくことと、負けた場合のリスク(自分が喰われて死んでしまう上に、強化されて周りを殺さんとする程に狂暴になる)、そして夜にしか使えない、というリスクの多さを家族に指摘されて、許可無しでの使用を禁止されてしまった

但し、後述の応用により、弱くて少ないながらも定期的に安全なオーラ補給を可能にした

”黒い秘密のカボチャ入れ(バームブラック)”

魂の提灯(カボチャランタン)を始めとした一部の発を隠すために作った発

名前の由来はアイルランドでハロウィンに食べられる、伝統的なドライフルーツ入りのパンまたはケーキから

ランタンを始めとした”自分のオーラでないもの”を入れた物は隠すことが難しいので、自身の影に入れるという方法で隠すという方法を取った

応用：基本的な応用を3つ紹介

魂の蠟燭（ソウルキャンディ）・カボチャノランタンの応用、回収したオーラを小さな南瓜型の蠟燭に加工して前述のバームブラックに入れて保存できるようにした

使用する際はオーラを流して火を灯す仮定が必要

火（のように見えるが、正体は新のオーラ）が灯っている間、新のオーラ量とメモリはかさ増しされる

その為、灯した蠟燭が多ければ多いほど強くなる

それを利用して新は即興で使い捨ての発を創造、様々な局面で活躍できるようにしている

生気の勧誘（ハロウィン・パレード）：ハロウィン・パーティーの応用、周囲の生き物が垂れ流しているオーラを円の範囲内限定でカボチャノランタンに誘導、保存する

垂れ流しているオーラを誘導しているだけなので、対象には影響もなく、得られるオーラは量も少なく、質も低いながらも昼も夜も使えて、安定した量を得られる

南瓜の工房（ハロウィン・ギフト）：バームブラックの応用で名前を変更した

自身の影から黒いカボチャノランタンを作り出し、対象を捕食、不要なものは吐き出して、必要なものを使って様々なものを作ることができる

これを利用して、汚れのみを取ったり重いものを運んだりと様々な局面で活躍する

材料さえあれば何でも作れるためお金にも困らないだろう

二十九話：予定

父からミッドチルダへの旅行の許可を貰えた新……

彼は今、旅行先での要りようになるものを買いに出していた

因みに、今日の学校は休日により休みである

「えっと、タオル買った歯磨きセット買った、お菓子買った……」

買った物を確認しながらこっさりマイバックの中に出していた
南瓜の工房（ハロウィン・ギフト）に入れていく新……

その際に自身にとある誓約がかかっているが、今の新にはなんの問題もなかった

「……うん、これで全部だな」

買ったものを確認して、全てが南瓜の工房（ハロウィン・ギフト）に
収まったのを確認した新は、南瓜の工房（ハロウィン・ギフト）をマ
イバックの中の影に沈め、空になったマイバックを畳んでポケットに
入れる……

「まだ時間もあるし、何しようかな……」

時計を見ると、まだ門限までかなり時間がある……

ぶっちゃけ、お昼にすらなっていない……

「（義姉ちゃんも今日はなんか用事がある、って出掛けてるし、母さん
もそれについていく形で家にいない……父さんも出張で空けている
……）」

つまり、このまま遊びに行っても問題ないのだが……

「なんか遊ぶ気にならないんだよなあ……」

帰ってダラダラ過ごしながらオーラの回収を行うか、本屋で立ち読
みしながらオーラの回収を行うか……

そう思っていた時だった

「あれ？新くん？」

ふと、声をかけられた……

それにたいして振り向く新、そこにいたのははやてだった

「？あれ？はやてさん？」

「あはは、はやてでええよ……新くんは何しとるん？」

「ミッドチルダに行くから、必要なものを買いに来てたんです……もう買い物終わって、これからどうするか、考えてたんです」

—はやてさんは？

「ウチも今買い出し終えたところや、今日卵とかが大安売りだったんですよ」

そう言いながらはやては持っていたチラシを見せる……

……豚バラ肉150gで75円は安すぎないだろうか？

「……やっす……!!」

「やろ？せやから競争激しくてなあ……」

—魔法も使わなあかんほどなんよ

はやての言葉に思わず「へ？あんた一般人相手に魔法使ってるの？」と思わず突っ込みそうになる新……

だが、なんか今突っ込み入れたら負けな気がするので我慢した

その間もはやては言葉が続ける

「……せや……新くん、お昼まだやろ？」

「……？たしかにまだだけど……」

「そやったら……」

その後のはやての提案に、新は折角だからと乗ることにしたのだった

「それじゃ……今から支度するから少し待っててな〜？」

そう言い……エプロンを着けて準備し出すはやて

さすがオカン系美少女、様になっていた……

はやての提案とは、八神家……

つまりはやての家でお昼を食べないか？というものであった

何でも、家族全員が任務のため家におらず、一人でのお昼は味気ないと思っていたのだそうだ……

因みに、なのは達も用事があるとかで遊べなかったらしい

新にも、ミッドチルダへの旅行について色々伝えたいことがあったらしいので、それもかねてらしい

そして今、エプロンを付けたはやてが飯の支度を始めていた……

そして新ははやての調理が終わるまでリビングのソファ―に座っているのだが……

「……………」

―なにもすることがない……

手持ち無沙汰で暇をもて余していた……

はやての手伝いをしようと思っていたのだが、本人からは「お客様を手伝わせる訳にはいかへんから、座ってテレビでも見てて」と言われてしまったのだ……

仕方なく、座ってテレビでも見ようか？となるのだろうが、ここは他人の家……

なんか勝手にテレビをつけるのは気が引いてしまうし、新自身あまりテレビを見ないため何かないか見渡していた……

「……………」

ふと、テレビの横にある棚にある、一冊の本が目に入る……

それは、新の原作知識で見たことがあるものだった

「闇の書……いや、夜天の書か……」

夜天の書……

アニメ”魔法少女リリカルなのはA’s”に登場する、キーアイテムである……

各地の偉大な魔導師の魔法を記録し、研究するための資料本のような性質を持つのだが、世代を越える内に何者かにより変質……

闇の書、と呼ばれるようになってしまったモノである

「(確か、原作では解決してもう危険性はないんだっけ?)」

其を見ながら、新は原作知識を思い出しながら其を見つめる……

「(飯できたよ?)」

その際、はやてから声がかけられた為に見つめるのを止めてはやてのもとに向かう新……

「すみません、いただきます」と礼を言いながら椅子に座る

因みに、メニューはサツと作れるように焼きうどんだった

「焼きうどんにしたんやけど、大丈夫?」

「あ、はい……焼きうどんが良いです」

その言葉に「そっか？」と微笑むはやて……

「それでは、改めまして……」

「いただきます！」（全員）

箸を手に取り、早速麺を口に運ぶ……

感想は

「…どうかな？」

「…美味しい!!」

「ふふ♪良かった」

それからも色んな話（主にミッドチルダについて等）をしながら、箸は進み……

「ごちそうさまでした」（全員）

きれいに完食した

「とても美味しかったです!」

「あはは、ありがとう。…それじゃ…片付 けよか？」

「手伝いますね？」

「別にええよ？新君は、お客様なんやし」

「いえ、ご馳走してもらってなにもしないのは、家族に怒られます。…
せめて食器を運ぶぐらいはさせてください」

—主に俺のために……!!

内心、そう叫ぶ新……

こういう事には結構厳しいのだ、固導家は

「ん〜…それじゃ…お願いな？」

「はい」

こうして二人で分担しながら食器を片付けていった……

片付けも終わり、話しながら茶を飲み、リビングでゆっくり寛ぐ

二人……

そこで、はやては何か思い出したように話し出す

「あ、そうや新くん、旅行についてなんやけど」

「?ああ、そうだそうだそうだ……何か話があるって言ってましたね
?」

すっかり忘れていたのか、思い出したような声を出す新……

新くんもいま思い出したんやね……?と、苦笑しながらはやては旅行の日程……

というよりはスケジュールを話す

「まず、初日は移動と、うちらが用意したホテルにチェックイン……そのあとは夕飯まで自由にしてええよ?……ただ、夕飯は管理局のお偉いさんもいるから、出きるなら正装して欲しいって話や」

―服はこっちで用意するから、心配しなくてええよ?話を続けるはやて

「で、二日は上層部を集めてもう一度念についての説明……質疑応答もやって欲しいんやけど、平気?」

その問いに大丈夫、と答える新……

其を見て満足げに頷くはやて……

だが、三日目のスケジュールについて少し困ったような顔になった「んで、三日目なんやけど……」

「?」

言いよどむはやてに?を浮かべる新……

しかし、この後のはやての言葉に嫌そうな顔をしてしまいそうになった

「百聞は一見に如かず、ということでも模擬戦して欲しいって……」

「ええ……」

其を聞いて困る新……

何度も言ってるが、念は秘匿技術……

確かに念の存在は公表したし、”調べるなら勝手に調べて良い”と許可も出したが、ここまで無骨にお願いするとは思わなかった……

―てか、模擬戦で……俺非殺傷できないんですけど!?

念を持った攻撃の危険性を知らない相手からの提案に、どうすれば良い?と言う顔をする新……

これにははやても困り顔である

「……やっぱり、難しい?」

コクリ、と頷く新……

「念の含んだ攻撃は、相手を念能力者として覚醒させることもある代

わりに、……まあ、”倒してやる!”とか”倒れる!”……時には”殺してやる!!”っていう”殺意”といったモノも含んでしまうから、危険なんだよ……念に目覚める代わりに下半身が動かなくなった、とか腕が千切れたり、目が見えなくなったり……最悪、その人が念に目覚めたシヨックで死ぬこともあるから……」

「……も、模擬戦はなしの方向で納得させるな?」

はやてのひきつった顔を見て、宜しくお願いします……と、頭を下げる新……

その後、四日目は自由時間で観光の案内をする、という話や、五日目に帰る、という話も重終わり、おすすめの観光スポットについて教えてもらったりして夕方の帰る時間まで時間を潰した新なのであった